

第1回福島第一廃炉国際フォーラム

セッションⅡ

福島第一原発の廃炉への取組み及び

地域社会とのコミュニケーション

- ジャーナリスト・環境カウンセラー 崎田 裕子
- 東京電力福島第一廃炉推進カンパニー プレジデント 増田 尚宏
- 放射線影響研究所理事長 丹羽 太貫
- 原発震災を語り継ぐ会 主宰 高村 美春
- 一般社団法人 AFW 代表理事 吉川 彰浩
- 慶應義塾大学特任教授 遠藤典子
- 経済協力開発機構原子力機関(OECD/NEA)事務局長 W. D. マグウッド IV
- 国際原子力機関(IAEA) 事務局次長 J. C. レンティッホ

(注) 当日通訳された内容をそのまま記録していますが、実際に話をされた言語による記録に基づいて若干の補正をしております。

崎田：

皆さん、それでは第2セッションに移りたいと思っておりますが、第1セッションでロザ・ヤングさんから3つのメッセージをいただきました。

技術と規制と人というお話でした。その人ということ 키워ドとして、この第2セッションのほうでは、人のコミュニケーション、そういうところにきちんとスポットを当ててお話をしたいと思いますが、先ほども福島の方たちと、きちんと一緒に取り組んでほしいというお話がありました。今回、ご覧いただいているように壇上に福島で活動されている方もお越しいただいておりますので、いろいろと積極的な意見交換をさせていただければ、ありがたいと思っております。

事故から5年たちまして、私、檜葉から埼玉県のほうに避難されている方と先日お会いした時に、廃炉の国際フォーラムが開催されるというお話をしました。

やっとここまでできたか、というような言い方をしておられて、やはり除染から環境回復、そして復興の道筋が少しずつ進んできて、その時に、やはり廃炉というものを明確にするということで、福島県民の方、あるいは全国の方にとって、大きな次のステップにきたという印象が、大変強く伝わったのではないかと思っております。

その時に、今日、朝から基調講演をいただいている皆さんのほうから、廃炉は、やはりきちんと進めていくために、そのリスク低減策に対しての情報発信と、地域の方の理解、その全体を醸成していかなければ進まないというお話しが盛んにありました。そういうことに関して、地域のキーパーソンの方にもお越しいただいておりますので、きちんとお話を進めていきたいと思っております。

私から最初にひと言だけ申し上げると、この最初の大事な廃炉の国際フォーラムの中で、この地域コミュニケーションの重要性ということに、しっかりと視点を合わせたセッションを初日にこうやって、企画をしていただきました主催者、あるいは関係者、そして世界中からお越しいただいたご専門家の皆さまに心から感謝を申し上げます。そして敬意を表させていただき、これから、福島の皆さんと共に、そして、それを一緒に取り組もうという多様な方々と共に、この場を作っていければと思っております。

皆さん、よろしく願いいたします。

では、この後の進め方についてお話をさせていただきます。

大きく分けて、2つなのですが、最初にご登壇いただいた方から情報をいただき、情報共有の時間といたします。後半は、それをもとに福島はこれからというところですので、少し皆さんと意見交換をし、そして会場の方からご意見、メッセージのある方から少し発言をしていただく時間を取らせていただき、最後に、今日お越しいただいた研究者の皆さんから、マグウッドさん、そして、レンティッホさん、きちんとアドバイスをいただくこと

というような形で進めていきたいと思いをします。

ですから、最初は情報をいただき、共有する。後半がそれに関する意見交換、コミュニケーションのセッションですので、そういうやり方でやらせていただきたいと思います。

なお、情報共有に関しても、このご登壇いただいている方は、非常にいろいろな立場の皆さんにお集まりいただいております。お分かりのように一番左手にいらっしゃいます、東京電力 CDO の増田さんからは、今、東京電力 1F のサイトで、どういふうにリスク低減の取り組みをしておられる、あるいは、情報発信の取り組みをしているかということ、実施者のほうからお話をいただきます。その次の丹羽理事長、そして、丹羽理事長がぜひ地域の方でしたらこのお二人とご推薦いただきました高村さんと吉川さんのほうから、地域側からそういうコミュニケーションに関して、どういふうにお考えになっているか、お感じになっているかということをお話しいただきます。

そして最後に慶応大学の遠藤先生のほうからは、地域だけではなく、社会一般からの視点として、この課題に対して、どういふうに捉えているかをお話しいただきます。

私もちょっとそこに情報を提供させていただく時間をいただきます。こういふうに進めてまいりたいと思いをしますが、肩書を付けさせていただくのは、ここまでで、この後は全員、さん付けでやらせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、皆さん、話を始めていきたいというふうに思いをしますが、それでは東京電力の増田 CDO のほうから、お話をいただければありがたいと思いをします。よろしくお願いいたします。

増田：

崎田先生、どうもありがとうございます。

ただ今ご紹介いただきました東京電力福島第一廃炉汚染水対策責任者の増田尚宏と申します。

今日はこのセッションの開始にあたりまして、最初に報告させていただく機会を得まして光栄でございます。

私、今日はですね、この福島第一の状況と情報発信について、情報発信というと一方方向になってしまうので、コミュニケーションのつもりでおりますが、こういふことについて、まずご報告をさせていただこうと思いをしていますが、廃炉の取り組みはけっこういろいろなところでお話をさせていただくのですが、情報発信、あるいはコミュニケーションというところは、今日のセッション 1 でも、非常に私は本当に有意義な議論を聞かせていただきましたが、われわれがなかなか上手くない、あるいは、今まで外であまりお話をしたことがないものでございます。ぜひ、今日はここでお聞きいただいて、その後、議論をいただければありがたいと思いをします。

まずは、最初に、われわれ福島第一の現状についてご報告をさせていただきたいと思いをします。

動画を準備いたしました。ぜひまずご覧ください。9分ほどあります。

動画の音声：

2011年3月11日、過酷な事故を起こしてしまった福島第一原子力発電所。多くの皆さまのご協力をいただきながら廃炉へ向けて歩みを進めています。発電所の現状について事故当時を振り返りながらご紹介いたします。

1号機から3号機は電源喪失により原子炉を冷やすことができず、燃料が溶け、大量の水素が発生し、1号機と3号機、3号機とつながっている4号機の建屋が水素爆発にいたりしました。現在は各号機とも安定冷却を継続しています。事故当時の1号機です。1号機は燃料取り出しに向け、放射性物質の飛散を抑制する目的で設置していた原子炉建屋を覆うカバーの解体を進めています。2号機は1号機の水素爆発の衝撃により、原子炉建屋上部側面のパネルが開き、水素が外部へ排出されました。現在はパネルを閉じ、放射性物質の飛散を抑制しています。また、燃料取り出しに向けて、原子炉建屋上部の解体を進めています。3号機は2015年8月に燃料プールの中の大型瓦礫を撤去しました。2017年度内に燃料取り出しが開始できるよう、燃料取り出し用カバーや、燃料取り扱い設備の設置準備を進めています。4号機は燃料プールからの燃料取り出しが2014年12月に完了しました。これにより安全性を確保し、リスクを大幅に低減しました。

海側エリアは津波と原子炉建屋の水素爆発の影響を最も受け、いたるところで瓦礫が散乱していました。廃炉作業に向けて高線量の瓦礫を撤去し、線量の低減をはかりました。撤去された瓦礫は発電所構内にまとめられ、保管されています。構内のあらゆるところで、地表を舗装するフェーシング工事を実施しています。これにより雨水などが地面にしみ込み、地下水になることを防ぐとともに、放射線量を下げて作業環境を改善することができます。

汚染水への対策も進んでいます。汚染水に含まれる放射性物質を取り除く施設として多核種除去設備やモバイル型ストロンチウム除去装置などで多重的に汚染水処理を進めてきました。その結果、タンクに溜めてきた高濃度汚染水は、一部を除き、2015年5月に浄化処理を完了しました。タンクエリアでは事故当時はフランジ型タンクなどを使用していましたが、現在はより信頼性の高い溶接型タンクへの移行が進んでいます。役割を終えたフランジ型タンクは順次、解体しています。

このような取り組みによって、構内環境も大幅に改善されました。事故当時は構内のすべてのエリアで全面マスクを装着して作業をしていました。現在は、半面マスク、防塵マスクやサージカルマスクで作業できるエリアがご覧のように拡大しました。一般作業服で移動できるエリアも拡大しています。

地下水への対策も進んでいます。海への地下水の流れを止めるため、1から4号機建屋の海側におよそ800メートルにわたって、鋼鉄製の杭を打ち込んで作った遮水壁を閉じる作業が2015年10月に完了しました。これにより港湾内の環境はより安全な状態が保てるようになりました。事故当時、混乱を極めて

いた、免震重要棟も現在は落ちついて業務をできるようになりました。

爆発の影響で使用できなくなった事務本館の代わりに、現在は新しい事務棟を作り、廃炉作業に携わる1,000人を超える社員が業務にあたっています。事故当時のJビレッジです。作業員の前線基地として、全員がここで防護服に着替え、発電所へ向かっていました。今では作業服のままバスに乗って行けるようになりました。防護服への着替えやマスク装着は福島第一構内に作られた入退域管理施設でおこなわれています。万が一の事故に備えて、救急医療体制も整っています。救急医療室には専門医師、救命士、看護師が24時間常駐しており、医療機器も充実しています。2015年5月には大型休憩所も完成しました。空調設備の整った快適な空間で休憩やミーティングができるようになり、また大熊町の給食センターで作られた福島県産の食材を使った、温かい食事を食べられるようになりました。私たちは、今後も30年から40年を要する廃炉作業を多くの方々のご協力をいただきながら、安全かつ着実に遂行してまいります。

増田：

ちよっとここに凍土壁を追加してまいりました。10日ほど前にスイッチを入れましたので、汚染水対策の最後の要として、しっかりとこれを運用していこうと思っています。今、地下、2、30メートルほど掘ったパイプの中に凍結用のマイナス30度の液体を流して、まわりを凍らせることをやっています。この原子炉建屋、タービン建屋すべてを囲んでしまって、外から来る地下水が汚染水になるのを防ごうと考えています。

監視の設備もしっかりできました。これが、その作っている時の状況でございます。道路の下にもこうして入っている状況にあります。この1本、1本が地下30メートルまで入っている様子になります。しっかりと今スイッチが入ったばかりですので、温度が順調に下がっていることは確認していますが、これから氷ができていて地下水と建屋の中の汚染水が、水位が決して逆転しないように、しっかりやってまいります。

ここから簡単に、プラントの状況を説明しますが、山名先生が午前中かなり詳しくやっていただきましたので、私は、はしりながらいきますが、燃料の溶けだした1号、2号、3号の冷温停止の状態がしっかり続いております。それは温度をもって、確認していますが、右の下の写真に示しましたように、われわれのところには、事故当時からは野戦病院のような状況でいろんな設備を作ってまいりましたが、ようやくこうやって集中的に監視したり、操作できるような仕組みが整ってまいりました。これで信頼性高く操作をおこなう、あるいは監視をおこなうことを続けてまいります。

これは各号機の様子ですが、これは先ほどのビデオで確認いただきましたので、割愛します。これは、そのモニタリングです。やはり皆さんにとって一番重要なのはダストですとか、放射線の線量、あるいは海の汚れた状況だと思います。こういったものもしっかりと監視をするシステムが整ってまいりました。また、サイトの中でも、今、86カ所に右の写真においたような線量率計を作って、作業をやっていただく方がなるべく簡単な服装で仕事ができても、それでも放射線に対しての不安を払拭できるようにということで、こういった線量率

計あるいは情報をしっかりと提供するようなシステムを整えてきました。ようやくここまで来たという状況です。

実際の大气中の放射性物質の濃度ですが、震災の直後は 1.7mSv/年ほどあったものが、今は 0.00068 mSv/年と、これは敷地の境界に人がいた時にどれだけ被ばくするかという数字で見えますが、全体としてみると4,500分の1くらいに放射性物質の放出は減っているという評価ができております。また、海のほうも見ていただくと、震災の直後に比べて100万分の1から10万分の1程度に濃度が下がっております。今は、先ほどのビデオにあった海側遮水壁というのができた効果というのを右側の真ん中のグラフに示しておりますけれども、しっかりと遮水壁を閉じた後は、放射線物質の濃度が低く保たれているのをご確認いただければと思います。海も気体も、こういった形で、今、しっかりとコントロールができていくというふうには判断しております。

これは、その除染がどう進んできたか、また現場の作業環境がいかに良くなったかということですが、明後日、皆さんには現場に行ってくださいツアーがあります。その場所でしっかりとこれは現場の様子を見ていただければ、ありがたいと思います。桜も今、満開ですので、桜と共に福島第一を味わっていただくとありがたいと思っています。これは、その作業員の状況ですが、今、毎日6,000人から7,000人の方に働いていただいています。この方々に安心して、ずっと安全に働いていただくことを、われわれは環境整備あるいは契約上の工夫もしていきたいと思っております。また、そこでの被ばく線量が右の下にありますが、今、平均で月々0.47 mSvくらいになっています。12倍していただくと、だいたい年間5ミリ、6ミリ、7ミリ程度の被ばく量という形で、皆さんが仕事をしている状況になってきました。これは、もう、どう変わってきたかですから、割愛します。

ということで、ロードマップについても先ほど山名先生からございましたので、これも省略させていただきます。ということで、これがプラントの状況でございますが、私たちこのプラントの状況の中で、今、仕事を進めていますが、私は今、普通の現場に戻すのだというのを合言葉にやらせていただいています。普通の現場で品質の高い仕事を、あるいは怪我、死亡事故のない現場をしっかりと築いていきたいというふうに考えております。

ここから今日のメインテーマ、情報発信でございますが、それについて、ちょっとご紹介します。情報提供、コミュニケーションについては、われわれ通報連絡というのが一番、主になりますが、事故、トラブルのあった時の通報連絡、あるいはデータの公表というのを今までもやってきましたというふうに、何回も何回も伝えていきます。震災前からです。実は原子力というのは、やってもそれがうまく伝わらない、あるいは隠しているという言葉につながる事が非常に多かったです。

反省点がいっぱいあったのだと思います。これからご紹介するのが最近した反省ですが、こんなことをやりましたといいながら、ちょっとこれは物足りないというところがあると思います。

2つの事例で紹介します。

ひとつめが、これが去年の2月です。2月25日の新聞と26日の新聞をここに出しましたけれども、

ここには技術的な問題というよりも、われわれの情報の発信の仕方、あるいは皆さんとのコミュニケーションの仕方が悪くて、新聞の一面をかざってしまったような記事が2日連続、続いたということだと思います。汚染した雨水が港湾のほうに流れていったというものでございます。こういったところを端として、われわれの情報がうまく外に出ていない、あるいはコミュニケーションが非常に悪いということから、この時に第三者機関によってわれわれの情報公開について、よくチェックをしていただきました。

その結果が、①、②に書いた社会目線に立った情報公開の精神が社内に浸透していない、社会の方々の心配事と社内が技術的な観点から判断しているものが、かなり乖離している、というのがひとつめの指摘です。

2つめが昔から約束していることを、ちゃんとやっていないじゃないかと。約束して情報を公開するといいながら、公開していないデータがあった。あるいは計画的にやりますとあって、それが計画的にやられていないものがあった、というのが2つめの指摘でした。

これは今日のセッション、先ほどのセッションのとおりだと思います。約束がしっかり守れていない、あるいはデータがしっかり出ていない、皆さんとのコミュニケーションの観点で必要なものがしっかりと伝えていないというところが、まさに先ほどのセッションの議論と同じかなというふうに思って聞いていました。

われわれ、これに対して、廃炉のカンパニーとしては、まず技術系の管理職が記者会見とか実際に参加して、社会目線で広報活動も経験して、皆さんが何を気にされているのか、あるいは普通の議論というのがどうのものなのかを、しっかりと経験するというのを全員に対してやっております。

また、過去の約束をしっかりと守る、データはすべて公開するというのは、再度、徹底したところでございます。

こんなことから、データの公開、これはウェブなどを見ていただくとかなりのデータが今、出ておりますが、そういう形をとるようになってきました。また、コミュニケーションについては、リスクコミュニケーターという社内に、その専門の人をおいて、その人たちによってチェックをしてもらっているという状況になっています。

また、地域のステークホルダーというのも対話を充実するために置いておまして、皆さんとの意見交換というのを積極的にやるという体制を整えてきました。

もうひとつが、先ほどちょっと出ていた建屋のカバーの解体の話でございます。これは、1号機なのですが、

1号機はこの一番上の写真にあるように、震災のあと爆発して、瓦礫がいっぱいある状況にありました。

これをまずカバーで覆うということをやまして、今、何がおこなわれるかという、このカバーを外して、瓦礫をどかして、使用済燃料を取り出したいと思っているわけです。

屋根のカバーを外しますと、これについては当然ダストが飛ばないようにしますということで、仕事を始めようというのを2012年の夏ごろ、われわれ、地元の方々へご説明したり、皆さんに対して発表させていただきました。本当にこれでダストが飛ばないのか、あるいはダストが飛んでいるか飛ばないかの確認はちゃんとできているのか、周辺に何かあった時の連絡はどうしているんだ、というようなところから、かなりいろんな議論をさせていただきました。

結局、議論に1年かかってやって、この結果と書いたところにあるように、ダストの監視を強化し、あるいはモニタリングポストのデータ、今はライブカメラで福島第一の様子は、皆さん、すぐに携帯電話で見られるような状況にあります。そこを今、整えたところでございます。

こういったこともやっぱり意思決定をやる上で、必要なことの議論、あるいは透明性というのをしっかりと確保して仕事をやっていくというところが、とても大事だというのが、ここから得られた、われわれの反省です。

こういったことを今、踏まえて、コミュニケーションをおこなうということをやっています。こういったことを踏まえて、他にやっています活動をご説明しますと、3D等が今はよくいろいろありますので、これから福島第一でどうやっていくかというのを、ご説明したり、地元の方にご出演いただいて、様子をお伝えする動画を作ったり、あるいはわれわれの活動をこの真ん中の写真などは、われわれの社員でございまして、実際に社員に自分の担当業務を、どういうものかというのを説明し、それを動画で皆さんに見ていただくというようなことも始めました。

また、これは今、福島第一を視察していただいているという事例でございまして、行政区の方々、今日もコミュニケーションでそういった単位でやった方がいいだろうというのも出ていましたが、行政区の方、漁業協同組合の方、農業協同組合の方、そして学生の方々、といったような方を、団体として来ていただいて視察もおこなっています。非常に多くの方、2015年度で6,700人の方に視察をいただいておりますが、どんどんやはり福島第一を見ていただくのが大事かと思って、仕事を進めているところでございます。

これは地元での説明会です。これも私たち福島第一の中でやっている仕事については説明をするというのが、かなり出てきたと思うのですが、この例えば街の中でも、いろんな活動をさせてもらっています。

これについてもしっかりとご説明しないと、皆さんの不安をおおるとというのが非常によく分かりました。

また、海外に対しても、特にアジアに対して、福島第一の様子をしっかりとお伝えするというのが大事だということも最近、力を入れているところです。

韓国、台湾、シンガポールなどのテレビなどでもかなりの放映がされておりますが、かなり現実を伝えていただいているようなことに繋がっております。これは福島第一の作業員とのコミュニケーションです。

作業員も6,000人、7,000人の方がいるということは家族まで合せると非常に多くの方がいらっしゃるようになります。その方々が福島第一について分かっていないのは、やはりわれわれとしても、まずいと思いませんし、その方々が安心して働いてもらう福島第一というのを外にアピールしていただくように、こういったものも始めました。作業員に焦点を当てたポスターを作ったり情報誌を発行したりしています。

私は自分自身がこの地位になる時、通訳になりますということを申し上げています。通訳というのは地元の方々は何を気にしているのかを、発電所の中の所員に伝え、発電所の中で何がおこなわれているのかを、地元の方々に伝えるという業務だと思っています。通訳が良ければ、今日のセッションも同じですが、通訳がいいと会話は弾みますし、得るところは非常に多いと思います。

ところが通訳が悪いと何をやっているのか分からない、平行線で終わってしまう議論がいろいろあって、やっ

たという事実しか残らない。そんなふうにならないように、私はしっかりと自分が通訳となって、地元の方々のコミュニケーションをしていきたいというふうに考えております。

以上で、私からの報告を終わります。ありがとうございました。

崎田：

ありがとうございます。廃炉カンパニーの一番のリーダーが、自分は通訳になっていくというふうに宣言をしていただきまして、心強い限りだと思っております。

ぜひ、この後、ご発言の皆さんも、今のお話、けっこう東京電力がどういうふうにこれから対話をしていくかという情報、初めてだと思しますので、ご感想などがあれば、うまく込めてお話をいただければ、ありがたいと思います。

ご発言の準備をしていただいております、丹羽さんですが、どうぞ準備よろしくお願いたします。

皆さんも、よくご存知でいらっしゃると思いますが、ICRP の委員として長く活躍をしていただいておりますが、昨年度から広島で放射線影響の研究所に行っておられますが、ICRP の委員のご経験の中で、世界からのご専門家と福島の地域の被災された方々との対話集会というのを定期的に実施され、主宰され、本当にいろいろ地域の皆さんとの顔の見えるコミュニケーションをやってこられたということです。

私もそういう現場、何度も参加をさせていただき、大変、熱心に取り組んでいただいているというふうに思っております。そういう丹羽さんにとっての廃炉とコミュニケーションということ、お話しいただければ、ありがたいと思います。よろしくお願いたします。

丹羽：

どうもありがとうございます。丹羽でございます。

私にとって、今朝のセッションの展開は予想外のもので、大変うれしく思っております。最初、マグウッド先生が、結局、信頼の問題とか、コミュニケーションの問題、ステークホルダーの問題、などを取り上げられたので、ちょっとびっくりしました。その後も同じ流れの発表があり、午後の第一番目のセッションの、クラーク先生も、コミュニティーの中でのデコミッションングについて話をされました。セラフィールドから来られた市長さんと議員さんは、非常に見事に信頼とコミュニケーションの議論をなさいました。特に私にとって、印象的であったのは、イギリスでローカルリエゾン委員会というのが機能しておる。そしてフランスでもローカルリエゾン委員会というのは機能して、原発のある所では、そのような組織が機能しておるという事実であります。

今回の事故が起こった後、そういうコミュニケーションをする委員会があれば、どれほど良いだろうかと思っておったのですが、実際にその委員会が機能している実態をお聞きして、非常にわれわれ教えられるところがありました。

ということで、私のスライド、実は4枚、5枚程度なのですが、これ、ほとんど不要だと思います。これが実は

2 枚目ですけれど、これはちょっと説明しておきます。

災害、これは原子力災害に関わらないのですが、災害の初期段階で人々は自分で事態を自分でコントロールできない状況におかれます。だからこそ、外から行政がきちっと仕切りをして、対応をするということが必要になってきます。そのため初期段階での行政の主体的な役割は非常に大事であります。

ところが、事態が少し落ち着いてくると、その地域で主体になるのは、これは当然、住民でございます。ということは、ロールプレイとして、初期に行政がきちっとやり、それから、事態が収まるにつれて、住民の方の意見を反映しながら、再建に向かうという、これは鉄則であります。これは放射線においても、あるいはいかなる災害でもまったく同じということです。

そしてこれは今日何度もでてきた問題なのですが、理解と合意は廃炉の成功の鍵であるということ。それから私個人として、原発事故に対する、専門家の対応は、住民の必要に十分応えているものではなかったと、反省しております。

私自身、2011 年の 6 月に、いわきに最初に入って、お集まりの聴衆に向かって放射線の健康リスクはこういうものだ、と申しあげました。

若いお母さんがずいぶん多い講演会でありました。だいたい、学生相手に講義していても、学生の反応が良いか悪いかというのは分かります。でも、その時の反応は、すごく冷やかな反応であり、私にはなぜか分からなかった。後から福島入って、住み始めてからようやく分かったのですけれども、信頼関係がないところで、いくらサイエンスを議論しても、まったく意味がない。サイエンスというのが、機能するためには、信頼関係の上に機能するという、福島で思い知らされました。

だから、事故対応には住民の理解と納得、そして行政との共有が必要です。これは廃炉を進めるうえでも同じです。サイト外への拡がりをもつ廃炉の作業過程での住民の理解と合意、それから共有は必須であるということでもあります。そうすると廃炉プロセスの時に住民全員が合意できるかというと、これなかなか難しい。そういうことで、情報の流れというのは、大型の災害の時には、国から個人に流れて行きます。その間に市町村があり、次に、市町村より小さい地域の単位があって、最終的には個人という単位があります。

この情報の流れは双方向ではなく、どちらかというと、一方方向が多い。それから市町村から地域単位への流れも双方向ではないことが多くあります。地域単位とそれからその地域に住まれる個人というのは、これは文化を共有しておられます。地域というのは、もともと村のように、ひとつの神社ないし、お寺を共有しており、そこでお祭りもやるし、それから生活もするということで、生活の単位であり文化であり、共有する部分が非常に多い。そこでは地域の単位と個人の単位は、双方向の情報交流が可能です。

この地域というのはすごく強い緊密な組織であります。いわきで活動しておられる、安東量子さんという、私、知り合いは「隣組の強さというのは親子の関係より強いのだよ」とまでおっしゃるほど、地域のコミュニティーの力というのは、絆というのは強い。そういう歴史的な気風があります。

このような地域単位を今回の事故でのコミュニケーションをターゲットにするのは有用ではないかと思えます。市町村単位での活動は個人まで通らないし、共有に至る効率は極めて悪い。でも、地域単位での共有はぶれない。一方、個人単位での共有は個々の理由により変化する。

この中でぶれない、一番のものは地域単位ではないかと考えております。だから、いろいろな方々の智恵を集めて、福島復興のための廃炉、福島の方々のための廃炉を、地域を単位にして進めていただきたい。より速やかな復興を祈っております。最後に、これは、大好きな伊達市のある地区の桜なのですが、こういうところがいっぱいあって、福島の春は素晴らしい。

外国から来られた方は、ぜひとも、きれいな福島を見て帰っていただきたいと思えます。以上です。

崎田：

ありがとうございます。実は最初に準備の皆さんが丹羽さんに、30分お願いします、というお話をされたそうなのですが、「いやいや僕の話だけではなく、本当に地域に根差して活動しておられる方のお話を、ぜひ共有をしたらどうでしょう」というご提案があったということです。これからお二方のお話を伺うことができ、本当に今回、良かったと思っております。

最初にご紹介させていただきたいのが、高村美春さんなのですが、高村さんは、南相馬のほうにお住まいで、今、被災地で母親としての想いを伝える語り部として活動していきたいとおっしゃって、今日のご参加は、原発震災を語り継ぐ会を主宰しているということで、ご登壇いただきました。環境大臣の原子力被災者との健康についてのコミュニケーションに係る有識者懇談会の委員とか、いろいろなことに市民の目線から、一生懸命、関わっておられる方です。ぜひお話をいただければと思います。

高村さん、よろしく申し上げます。

高村：

皆さま、お晩でございます。お晩でございますは、福島県の言葉で、こんばんは、です。もう夕方ですので、お晩です、という言葉を使わせてください。今、ご紹介にあがりました私は福島第一原発から直線距離で25キロの地点に住んでおります、高村と申します。

今、ご紹介がありましたように、現地では語り部として活動させてもらっております。語り部と申しましても、津波、原発避難、さまざまな場面がございます。ただ私の場合は、私が体験をした、私をもって事実としてお話をじかにお話させてもらうということを、常に心がけて、語り部として活動させてもらっております。

今日は、実は、資料は何もございません。正直言いますと、何を話そうか、先ほどまで悩んでおりました。ただ、今日は、世界から皆さまがいらっやってくださった。その内容から、とても素晴らしい内容をお聞きして、今日は私の家族の話を皆さまに少ししたいなと思っております。ただ、その前に、丹羽先生となぜこんなふうになったか少しお話しさせていただきます。ICRPのダイアログで、先生のほうからお声を掛けていただきました。正直申します。御用学者の先生に声を掛けられて、私はなんでそんなところで話をしなければいけ

ないのだという気持ちが先に立ちました。

福島県民は、いえ、浜通り、いえ、原発爆発後、30 キロ圏内、避難をした、自主避難、強制避難、今だに放射線、放射能というものに苦しんでいる方々が、たくさんいます。その中で、専門家、科学者、行政、もちろん国も、安全だ、危険だ、と言います。誰も正しい答えを導くことができませんでした。最後に私はチェルノブイリ原発にまいりまして、ウクライナ、ベラルーシの住民の方、同じ母親の方とお話しをさせていただきました。これは、同じ体験をした人間でなければ、この私の想いや、これからの子供たちのことは、知りえない。

ですから、正直申します。丹羽先生のお言葉を聞いても、何も私は分かりませんでした。ただ、ICRP のダイアログを打合せの時、先生とご飯を食べながら、正直申します、話しなんか聞いてられないや。だけど先生と故郷の川や海や山の話を見せてもらいました。先生は悔しいとおっしゃってくれました。「こんなにきれいな福島で子どもたちが遊べないのだよ。俺は小さい頃からこういうところで遊んでいたのに。今の子どもたちは遊べないのだよ。」このひと言で私はこの先生なら、分かってくれるのかな。対話とは人と人が顔を合わせて、心と心でお話することだと思います。ですから、語り部として、私自身も皆様と直接お会いして、目と目をお会いして、心と心でお話したい。ですから、ここで今日は、先ほども少しお話ししました私の話をさせてください。

3月11日、地震と津波として原子力発電所の爆発がありました。

私の親戚、兄弟はみな避難。強制避難の兄弟もおります。私自身は自宅が25キロ地点ですから、いわゆる屋内退避のち緊急時避難準備区域と変わっていった場所にあります。

自己判断、自己責任で避難をしろといわれた場所でもあります。私は子どもだけ逃がしました。当時、私は老人ホームのほうで介護の仕事をしていましたので、じいちゃん、ばあちゃんをおいては逃げられなかったのですね。ところが、3号機の爆発を実際にききまして、これはもういられない。

正直申します。成人した長男が泣いていたのですね。「お母さん、怖い。」下の子ども二人は逃がしました。

「お母さんが残るなら、俺も残るよ」と言っていた21歳の長男が、怖い。そうだよな、って。

「お前もお母さんにとっては子供だから一緒に逃げよう」というふうに私は逃げました。

正直申します。逃げたことでの罪悪感もあります。それは、強制で避難をしたわけではないからです。

自己判断、自己責任で避難をしたからです。強制避難があったら、楽なのか。そうではありません。

自主避難だから辛いのか。そうでもないのです。本当に怖いのは、何から逃げているのかが分からなかったから、怖いのです。

発電所の爆発はまったく予想がつかなかったかもしれません。ですが、広島、長崎の経験があったはずで、まったく違うかもしれません。ですが、私たちにとって、核というものは、同じです。

ですが、恐ろしさのレベルは、また違うと思います。その成人した息子は、避難先から戻った幼い弟のため

に、「実はお母さん、俺、原発作業員になろうと思うんだ。」と申しました。まだ、原発がおさまらず、まだ危険であるという中で、21歳の息子が発した言葉を聞いた時、私は、正直申しますと、戦争中に赤紙をもらった母親の気持ちはこういうものか。なぜお前が、若いお前が、わざわざそんなところに行かなければいけないのか。私は戦争に行かせるために子どもを産んだわけではなく、原発作業員として働いてもらうために、そうしたわけではありません。

ですが、私自身も震災前、ご縁があって東電さんの下請けのリビングサービスさんとちょっと実は仕事がありまして、第一原発の中の様子は知っておりました。それでも、あの時の爆発の音や線量の高さ、津波の後の瓦礫、そういったものが眼に浮かんで、なぜ私の大事な家族がそういったところで働かなければいけないのか。ここに残るといことは、そういった直面をする。

これから、廃炉になるかもしれない。

でも本当でしょうか。30年、40年、私自身、今48です。私が眼の黒いうちに終わりますでしょうか。

息子は私の説得を聞いて、結局、原発には参りませんでした。ですが、20キロ圏内のいわゆる帰宅困難区域で仕事をしたいということで、従事しておりました。それを止めることはできません。

ただ言えることは、決して、そういった地元のために、家族のために、この国のために働く人たちは、私は決して、ヒーローだと思いません。そんなファシズムはいらないのです。そういった言葉で持ち上げられている、そしてそういった若者が確かにいる。それは私は悲しいことだと思っています。

ただ、先ほど増田さんから廃炉の状況もありました。私自身、昨年と先月、吉川さんのご案内で第一原発、第二原発のほうの視察に2回程行かせていただきました。

正直、驚きました。こんなにも線量が下がって、今は窓口のほうにも女性の方が働いていらっしゃる。

私自身2011年の6月には実は東電さんの発電所の前まで、線量を測りに歩きました。自分自身が一番高いところで、300 μ Sv。ああ、こんなに高いのだということを経験しております。

同じ場所をずっと測り続けております。こんなにも線量が下がった。だけど、それは半減期を迎えただけであって、またこれからの半減期を迎えなければならない。ということは住民はそれを見届けなければいけない、見続けなければいけない。廃炉も同じです。

今、私自身も正直申しますと、先々月まで除染作業員をしておりました。

それは働かなければ分からないことがたくさんあるからです。ただ見に行って、話を聞いているだけでは分からないから、私自身体験しようと思い、作業員として約1年近く働きました。

そこで、すごく分かったことはあります。ただ、守秘義務がございまして、話をしてはならないという矛盾がございいます。そういったことも含めて、今、語り部として、私が体験したことをお話させてもらう。

今日はコミュニケーションの在り方というふうにお話させてもらいました。

私自身、恨みました。東電を、国を、こうやって住民を見捨てるのかと。その恨みをどうしたか。私は私が

何も発電所というものを、原子力というものを知らなかったから、こうなったのだと、そう思うようになりました。私自身が何も知らない。それは、例えば、先ほど増田さんがおっしゃいました。こちらが一生懸命、話をしているけれども通じない、分かっていただけない。そうです、私たちは、何も持たないからです。分からないからです。専門用語からして分からないのです。ですから、同じ言語を使っている人間でさえ、分からないのですから、もっと分かりやすく説明をしていただければ、分かるのです。

それは、あくまでもやはり対話だと思っております。今は正直、恨みとか辛みとか、そういったものを訴える場所ではないというふうには思っております。原子力発電所の是非を問う場所でもないと思っております。それでもいまだに故郷に帰れない方たち、帰りたくても帰れない、このまま狭い仮設住宅で一生を終えるかもしれないお年寄り、いまだにそういった方がたくさんいらっしゃいます。

私はその何万人の中のたったひとりです。

たったひとりの意見ですが、私は決して代表ではありません。私は私の言葉で皆さまに伝えたい。

それを続けていくことが、対話を続けていくことが、先ほど丹羽先生がおっしゃった、双方からのコミュニケーションではないかというふうに思っております。

ですから、私もこれから勉強していきたいです。セラフィールドの方のお話を聞いて思いました。

勉強したい、もっと学びたい。ですから、これから世界の皆さまには福島のことを、浜通り、福島第一原発、住民のこと、もっともっと見てください。そして、関心を持ち続けてください。私の願いはそれだけです。

そして、私は技術的なことは何も話できません。それでも皆様のご協力、ご鞭撻がなければ、廃炉は多分難しいと思います。ですから、何卒、何卒、よろしく願いいたします。

今日はお話させていただき、ありがとうございました。

崎田：

高村さん、ありがとうございます。

高村さんは、今、福島の中に住んでおられます。今、福島には福島県外に避難されている方、あるいは福島の中ですけれども、元のご自宅とは違う所に避難されている方など、合計 10 万人くらいの方がまだいらっしゃいます。その方自身が、それぞれのご事情の中で、いろいろなお考えを持っておられる、人生を持っておられる、そういう皆さんに、きちんと、それぞれの出来事、あるいは今日のテーマの廃炉がきちんと伝わっていくために、どういうふうな情報提供、あるいは対話、そういう機会を作っていくといいのか。

その辺をこれから皆さんとしっかりと考えていかなければいけないと思います。

それでは、次の、もうひと方、地域のキーパーソンの方をご紹介させていただきたいと思いますが、吉川さん、ご準備をお願いいたします。

吉川さんはやはり地域の視点で活動をされていますけれども、実は事故の当時は福島第二原子力発電所のほうで、ご勤務されておられました。その前は事故のあった第一原子力発電所の職員もされていたご経験があります。そういうご経験を踏まえて、この発電所の中で働く人のこと、あるいは今の廃炉のこと、い

ろんなことを多くの人に伝えることが必要なのではないかという活動を、今、されておられます。こういうような視点で実は活動されておられる方が、まだまだ本当に少ない。

あるいは吉川さんの団体くらいですかね。いろいろな活動の方いらっしゃいますが、廃炉ということを明確にキーワードにして、活動をされている方はまだ大変少ないということで、ぜひお話をいただきたい。やはり丹羽さんからご紹介をいただきました。本当に今日はご参加いただきまして、ありがとうございます。それでは、吉川さん、よろしく願いいたします。

吉川：

皆さま、はじめまして、AFW の吉川彰浩と申します。

AFW という言葉の意味を最初にお伝えしたいと思います。

Appreciate FUKUSHIMA Workers。私は元東京電力社員です。

先ほどの高村さんのお話、最初の時の想いを絶対に忘れてはいけない、今、そう感じております。

Appreciate の意味は感謝と敬意です。その感謝と敬意は廃炉に取り組む方々、そして復興で前に進んでいる方々、私は感謝と敬意を持って、そして次の世代にきちんとこの地域の故郷、先ほどイギリスのお話がありました、素晴らしい景色でした。

私が住んでいた双葉町と一緒にです。同じように思われたのではないのでしょうか。事故があり、この故郷がなくなるかもしれない。ですが、今、何か私たちが動き出せば、その故郷は残せるかもしれない。

私の活動は東京電力を辞めて、ただの一般人、何も肩書がなくなって、約4年になりました。

今、この場にしゃべらせていただくことが、大変恐縮な立場でありますけれども、私に取り組んでいる廃炉と地域をつなぐ、これは本当にこの日本で私以外、取り組んでいる方はいらっしゃらないのじゃないかな。

それくらい稀な取り組みです。ですが、今日一日のお話、通じてきたのは地域の方と廃炉で働く方々、皆さんが手をつないでですね、この地域をどう豊かに残すか、それを目指していくことが重要である。

今は稀かもしれませんが、これから事例を紹介したいと思います。

どんな効果をもたらしたか、それをご覧いただいて、これから先、今日、始まりかと思っています。

地域の方、原発関係者の方、規制側の方、国の方、海外の方、みんなで力を合わせれば必ず原発事故は乗り越えられると。そして、高村さんがおっしゃったように、被災された方々の気持ちも私たちは、きちんと受け止めて、過去に戻ることはできませんが、豊かな未来を築いていけると思います。

では、プレゼンの内容のほうに移りたいと思います。

私たちは取り組みとしまして、暮らしの視点で、廃炉を学ぶ。廃炉を学ぶというのは非常に難しいです。学ぶという言葉が正しくないのかもしれませんが、廃炉を知る。

でも、私たちはできれば学習のような気持ちで知っていただきたい、そんな思いから学習支援をやっております。そして、これがなぜ必要なのか、こちらご説明いたします。

今から5年前、私は当時、発電所で働いていました。家族は帰還困難区域に暮らしていました。親戚もです。当時の事故、皆さんもテレビでご覧になられたと思いますが、あの当時、まさか今のように避難区域が縮小して、廃炉と一緒に暮らす局面に移るとは誰しもが抱いていなかったと思います。たった5年で、実は一緒に暮らす局面まできていることは、避難区域の縮小されていることから伺えると思います。こちらに避難区域が解除になった町で、私は町の方と一緒に従来の田植えをしました。機械を使いません。手で植えて、手で刈る。地域の子供たちも遊びに来てくれました。これ、本当に楽しそうですね。ですが、ここにある質問を投げかけると、変わってしまいます。それは、「すぐ近くに第一原発があるのに大丈夫なの？」この私たちにとって、あたり前が否定される故郷、これは、原発事故から5年経っても続いています。

私はこの田植えをやった時に、いろいろな方から殺人イベント、人を殺すために田植えをしているのか、放射能汚染した大地でなぜ田植えをするのだ、そのようなことを言われました。原発がすぐ近くにあるのに、なぜやるの？この地域で暮らす方の想いを考えれば非常に苦しかったです。

では、この否定されないために、廃炉と暮らすことを地域の方、今日いらっしゃる皆さんは、特殊な方です。原子力関係者の方が大勢いらっしゃいます。知識も豊富です。本当にただの一般の方、おじいちゃん、おばあちゃんが、自分の言葉で廃炉を説明できるかといったら、とてもじゃないけど、できません。なぜなら、専門知識がない。じゃあ、専門知識がないなら学びに行こうと思っても、廃炉を教えてくれる場所は、今だにどこにもありません。あるとすれば、東京電力さんをお願いして、教えていただくしかない。最新の廃炉状況、どうしたら手に入る？東京電力さんのホームページあります。見ると詳しく載っているのですが、お年寄りの方はホームページを開くこともできません。では、一般的に分からないことがあったらどうするか。本屋さんにも行ってみよう。原発事故のあった、この被災した地域の本屋さんに行っても、廃炉が分かる本も置いていないのですね。そこで、私が考えたのは廃炉現場と地域をつなぐ場作りが、まずやらなくちゃいけないだろう。今、ある状態というのは、廃炉と暮らす方々、普通に暮らす人たちです。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、それが原発事故で、東京電力さんと信頼の喪失で壁ができてしまった。いわゆる喧嘩のような状態、対立ですね。事故直後のお話です。ですが、廃炉の状況は知りたいわけです。知りたい。でも、話す相手がいない。東京電力さんも良くなったことは伝えたい。壁が邪魔する。しかも対話がないわけですから、東京電力さんの伝えたいこと、知りたいことは一致しない。

では、この壁は取り払ってしまえばいい。これはコミュニケーション、対話だと思うのですけれども。壁を取り払ったうえで、距離も縮めて、知りたいと伝えたいを一致した時に、廃炉を知ることができるのじゃ

ないか。でも、それを成し遂げるためには、なかなか難しくてですね。そこで、私は元東京電力社員です。知識はあります。そして、私も被災者です。被災された方の気持ちが分かります。

要は、中途半端な立ち位置なのですね。東京電力の人間でもあって、被災された方と同じ気持ちの人間でもある。両方の気持ちが分かるのだったら、パイプにもなれるだろうか。

そして、パイプになって、住民の方です、主役は。

住民の方が廃炉を知れる環境、学習会を開きます。学習会ではありません。

座学で教える、例えばこういった大上段から、上から目線で教えても誰も耳なんか傾けてくれません。

こういう目を合せて近い距離でお話をして学習会をする。そして、見るだけではなくて、第一原発にお連れする。これは受け入れていただく、東京電力さんをお願いをしまして、私たちは生活のために必要です、知ることが。ですので、受け入れてください。こちら、写真に写っているのは地域のおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、ごくごく普通の方々です。学習会の資料、東京電力さんのホームページ、この1年ですごく読みやすくなりました。分かりやすくなった。

でも、先ほど高村さんがおっしゃってくださったように、それでも一般の方にとっては、難しいのです。

言葉の意味も分からない。ですから、こちら、東京電力さんからいただいている資料、こちらを翻訳する。

先ほど増田さんは通訳という言葉を使いましたが、私はこれを難しい言葉をいっさい使わず、丁寧に学習会を2時間もやります。

また、廃炉は生活のために見るだけではありません。次の世代の子どもたち、大学生の皆さんからすれば、私たち大人が残した負の遺産でもあります。そこから学ぶことも多いはずです。

日本の技術と世界の技術、事故の大きさ、そういった学び場として大学生をお連れしている取り組みもあります。注目していただきたいのは、これ発電所の入り口の写真なのですね。

発電所の入り口、防護服も何もいりません。これを知っている福島県民の方、圧倒的に少ないです。

でも、これを知っていたら、今、放射能はもしかしたら大気中に漏れているかもしれない。でも発電所の入り口ではこの状態でいられるのであれば、私たちの生活圏では、そこまで心配なくていいなんて言い方もできますよね。数値に示す、グラフに示す、それもととても重要なことですが、目で、体感させ伝えるということも重要だと思います。

取り組みをこの1年続けて、見えた課題があります。廃炉は40年、もしかしたら、もっと続くかもしれません。その間、住民の方が寄り添い続けるための基盤が必要です。

ありません。共有できればですね。そして、誰もが廃炉を語れるツール。

本でもいいです。ウェブでもいいです。なかなか今まで、そういうものがない。

そして、人材育成が必要。私しかやってないのでは困りますよね。発電所の中にしか専門家がないの

も困ります。住民の目線からすれば。

ですから、発電所の外に、住民の方と仲良く対話ができる、しかも専門性を持っている、そういう人間を増やしていくことが必要だと思います。そして、広域での取り組みが必要です。福島県の手側、もつといえは双葉郡だけの問題ではありません。廃炉というものは世界中にインパクトを与えました。少なくとも福島県全域にこういった場が必要と私は考えています。

最後にこれが今日ずっと、皆さんがお話してきたことだと思います。

原発事故を乗り越えて、次の世代に、「お父さん、その時、何やってたの？」と言われて、今、胸が張れないとしたら、胸を張れるように、民間、国、電力会社といった垣根を超えましょう。そして、協力してこういった場を作っていけたらいいなと思います。

最後に、私は何のために頑張っているか。

簡単です。単純。この子ども、大好きなのです。

子どもたちがあたり前をあたり前にできる故郷を作ろうと。そのためには、これ、皆さんも、そう思いますよね。そうすると、この会場の皆さん全員が実は仲間になれる。同じ共通目的を持って、手をつないでいくということを最後に締め言葉にさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

崎田：

ありがとうございます。

吉川さんは、東京電力で働いていたというご経験はありますが、ひとりの市民として、できるだけきちんと、どんな人にも分かりやすいような形で、きちんと見学をしたり、そういうような仕組みを提案したりしているということで、一生懸命、地域に根差しながら活動しておられると伺っております。

ありがとうございます。それでは、今、地域の目線の方からお話を伺いました。そして、このコミュニケーションを考える上で、もうひとつ大変重要なのは、社会全体からの視点というものが大事だと思っております。やはり、この福島の事故は、解決するのは福島だけの課題ではないはずで。

そういう意味で、今お越しいただいているのが、遠藤さんなのですが、先ほどお話を申し上げたように、慶応大学大学院の特任教授でいらっしゃいますけれども、ご経験としては、出版社にご勤務の後、海外経験とか、いろいろなお仕事をを経て、東京大学あるいは京都大学でエネルギー工学の博士号を取られたということで、いわゆるエネルギーのご専門家で、若手のこれから本当に頑張ってくださいとおひとりだと思っております。

そういうお立場で、社会の一員としてということも込めて、お話をいただければありがたいと思っております。よろしく願いいたします。

遠藤：

ご紹介をいただきまして、ありがとうございます。

ひと言、ちょっと違う所がありまして、エネルギーの工学、まったく工学のほうではありませんで、エネルギー政策のほうで、一応、博士号を取らせていただきました。

今日は、いろんな想いもあって、私も、こちらのほうに参加したのですが、今、地元のお二人のお話を伺いまして、私は何を話せばいいのか、頭が真っ白になってしまったところでございます。

大変、重いメッセージでしたし、私たちが何も地元のことを理解していないのではないかというような恐怖心を同時にいただきました。

私、こちらの会場に来ますまでに自分の車で運転してまいりました。大体、東京から福島の第一原発まで直線で 240 キロくらいありますが、いわき市までは 2 時間半くらいで到着します。

あと 1 時間、車を走らせれば第一原発のほうにたどり着くわけですけども、非常に東京からしてみると、近いなという印象を受けました。とつても、それこそ道路も整備されていて、近い土地なのに、なぜこんなに、5 年を経て時間を経つたびに、どんどん東京と福島、私は若干、遠くなってきたなというイメージをいだいてしまいました。

特に今日のお二人の話を聞いて、そのような実感がどうしても湧いてしまいました。3.11 の事故の時、少し思いだしてみたいのですけれども、東京でも実は震度 5 強、弱というような大きな地震に見舞われまして、実際に亡くなられた方も 7 名程いらっしゃいました。

私たちは東京にいて、地震から逃れる一方で、いつもテレビの中でいつも福島の状況がリアルタイムで映し出されていて、非常な恐怖心を東京にいらながらも抱きました。それが、私たちが抱いた恐怖心が、高村さんが先ほどお話をいただいたような恐怖心とはレベルの違うものなのだとということを、今日またまざまと実感したわけですけども。私もその時、小学生の子どもがおりまして、そのモニターを見ながら、子どもを西の地域に逃がす準備をしていました。もしかすると雲行き次第では東京にも被害が及ぶのではないかと、というようなリスクを回避しようという準備をしていたのですね。

実際に私は爆発が起こった後に、子供だけ福岡のほうの実家のほうに戻しました。でも一週間ほどして、それが沈静化されていくということが分かりましたので、東京のほうに戻したのですけれども、やっぱり母親とか女性という、どうしても子どものことを第一優先に考えてしまって、なんとかリスクから逃してあげようというふうな動きに出るのかなと。ただ、本当に申し訳ないのです、高村さんたちの、本当に今まさに被害を受けて、避難をされようと、そういう状況におられた方とはまったくレベルが違ってまして。

ただ計画停電という、電気がなくなる状態にあった地域もあったのですけれども、その中でも全然レベルの違うまだ安定した生活を送っていたのだというふうに思います。

この事故から 5 年がたった今も、まだ、実は放射能が怖いというふうに思っている方がたくさんおられ

て、例えば福島地域の皆さまもそうですし、福島から距離を置いたところの住民の皆さまもそうです。もしくは東京の方もそうなのですが、お母さまのほう子どもに危険が及ぶということで、遠い、例えば西日本地域とか沖縄の地域とかに移住したままの方がまだいらっしゃいます。

5年以上たって、まだ、子どもの健康状態が少しでも、ちょっとでも風邪をひいたら、これは放射能の影響ではないかというような、非常に恐怖心を抱いているというような、若いお母さんたちがいっぱいいるということ、報道を通じて知ったりします。

とはいえ、一方で科学的見地も積み上げられていて、実際に内部被ばくといったような深刻な被害は、さほど起きていないというような科学的なデータも集まってきているということになります。ただ、そこが、どうも私はこの情報は信じられない、国の言っていることは信じられない、まして事業者が言っていることは信じられないというような、先ほどご指摘があられたようなミスコミュニケーションというのがずっと存在しているというような状況にあると思います。

一応ちょっと、スライドも用意しましたので、こういう表紙で作らせていただいたのですけれども、それで私はどうしようかなと、私もエネルギーの政策周りで研究している研究者として、どうしようかと考えました。

私は特に、損害賠償制度について、詳しく勉強している研究者です。その一環として、エネルギー政策、原子力政策を見ているのですが、この会場をご覧になられても、だいたい男性です。

特に海外のお客さんは、外国人のお客さんは女性の方々にいらっしゃるのですけれども、日本でエネルギー、原子力となると、電力となると、もう、ダークスーツ、ネクタイ、という形になってしまって、女性というのは、もう、まったくその中に参加していないというような状況が長らくありました。

ただ、原子力の問題が、この事故の問題が起きて、もちろん被災者の地域の中ではこれが重要な問題になった。それが、だんだん周辺地域というものが過酷事故が起きるといことで、広がって行って、そして原子力がある種、イエス、ノーという世論を巻き起こして、国民全体の問題になってきている。これは、もしかして、私たちにも何らかのことができるのではないのか、ということで、これはまず女性で議論してみよう。

今まで議論する立場ではなかった女性、しかも子どもたちのことも考えるので、次世代のことについてよく議論するには、ふさわしいのじゃないか。あと、福島被害についても重要なテーマなので、今では男性もお料理される方、たくさんいらっしゃいます。お掃除も当然するでしょうけれども、こちらにいらっしゃる方々も。ただ、女性のほうが料理する、お買い物に行くというふうなケースも多いので、そういった生活に身近な母親たちの立場もあるということで、女性を集めて議論してみようというふうに思いました。

とはいえ、大変、高村さんには申し訳ないのですけれども、被災者の地域とは遠い、まずは東京でやってみようということで、しかも、どちらかというとエネルギーをたくさん使っている会社とか、エネルギーを生業としている会社とか、あとは、まったく関係のないセクターで働く女性たち、例えば、ファッション誌のエディターもそこにいますし、有名な宇宙飛行士の方もいらっしゃいます。レーシングドライバーの方もいらっしゃいます。

いろいろな立場の方々に参加をしていただいて、電気を使わないという人たちはいないわけですから、じゃあ、私たちが、これから30年、40年、どうい電気をこの日本の中で選んでいけばいいのか、原子力に対してどういふうに向き合えばいいのかということ話し合うということで、この有識者会議を作りました。

ですので、ここの議論の中では、例えば、いようなエネルギーの選択肢がある中で、どういエネルギーを選んでいこうということ話しあっているのですが、やはり福島事故に向き合うことなくしては、一歩も進めないということで、もう初回の1回目を実はメンバーであります、相馬中央病院から越智先生という方、こちら私たちのメンバーに入っただいていますが、この方に来ていただいて、放射線と私たちの食べ物との相関とか、あと今、福島で起っっている健康被害とは何なのかということ、詳しく説明をしていただく機会を得ました。

越智先生という方は、東京で生まれて、それこそイギリスに留学されて、まったく、相馬、福島とは関係ないところで、生活してられたのですが、一念発起して、福島の相馬市の皆さまと向かい合っ、おそらく高村さんも、吉川さんも、非常にお付き合いがおりになる先生なのですけども、彼女から詳しく放射線の話も伺い、食べ物リスクも伺い、いようなお話をさせていただきました。

それで分かったことは、やっぱり私たち、どちらかという、社会に出ていた女性たちだったので、ある程度、知識はあるのじゃないかなというふう思っていたのですが、いような誤解がありました。

ですので、それはひと言で言っしまえば何なのかという、過剰反応をしていたということになります。

東京のお母さんたち、特によく見られたのは、スーパーに行っ、どこの産地の野菜なのか手にとって見てみると、それで、福島産と書いてあったら、それを避けるみたいなことを、いようとやっっていたことがあっと思っます。

ところが今は、ひとつひとつの線量を全て、測っ、きれいにそれが公表もされてい、情報として与えられてい。私たちとしてはそこを安心して選択できるものなのだということを知りながら、なかなか放射線に対する漠然とした恐怖感があっ、それを手にしなかつたことも多かつた、ということ正直におっしやる委員の方もいらっしました。そこから、越智先生の話伺うと、どんどん誤解も晴れていっということになります。

その誤解が晴れていっと同時に、もしかしら私たちという方は、加害者だっのではないかということ理解したということになりました。

私たちは東京に住んでいました。福島にある原子力発電所は、東京電力福島第一原子力発電所、つまりあちで作っ電力は、私たちが一部、消費をしてい。多く消費をしていということになります。なのに、私たちはあの事故が起きて正しい情報を知ることもなくて、風評被害といわれるような、もしかしると一番のダメージだっかもしれないことを、遠くから与えていたのではいか、いよう認識がわれわれの中に醸造されてきました。

今度は委員の方から、どんどん、もっどん話が知りたいということで、実は英国大使館のほうにお願いをしまし

て、英国大使館のほうで、リスクコミュニケーションの専門家を呼んでいただいて、そこでミーティングもしたりもしました。こうやって、私たちまず知るといことから、始めていかなければならないのだなということ、この有識者会議の中で学んだということになります。

これはもっともっと広げていかなければならないというふうに思っています。私たちの活動、どんどん広がってこう思っていて、今年には実は G7 のサミットの年になります。

G7 のサミットがあらゆる地域でいろんな大臣会合がおこなわれるのですが、特にエネルギーの問題は北九州市、福岡県、西のエリアですね、北九州エネルギー大臣会合が開かれます。

そこで私たちはそちらの地域でシンポジウムを開いて、こちらは一般の、それこそ何もお仕事されていないような主婦の方とか学生の方とか、そういう方々とこの問題について話し合おうというふうに思っています。

北九州市では 4 月 20 日にこのイベントを催すつもりでおりまして、越智先生も来てくださって、また、この放射能の話も含め、議論をしようというふうに思っています。また 5 月 9 日には富山のほうでやります。9 月には三重県のほうでやります。秋には東京も予定しています。

こういう形で今まで私たちが 1 年間、話し合ってきたことを少しずつ広げていって、社会で共有していければなというふうに思っているところなのです。

一番大事なものは、私はいろいろな大事なことというのはあるのですが、先ほどから皆さまのお話を聞いて思ったのですが、情報というのは、おそらく上から与えられたものを下から受けるとか、よく詳しい人たちから情報を受けるとい一方方向だけではなくて、おそらく共感とか体感とか英語でいえばシェアすることというのが、おそらく一番大事なのだろうというふうに思います。

それが、今まではどちらかというと、増田さんを非難するわけではないのですけれども、情報発信というような形でいくら発信をされても、それを共感してシェアする形にならないと、それが多分、体得できないということになるのだと思います。それも、知識というはおそらく頭で考えるということよりも、実際に足を運んで、体で体験することということのほうが、むしろ共感に近いのではないかなというふうに思います。

なので、やっぱり、もっともって福島に足を運ばなければならないし、原子力のサイトのほうも見なくてはならない、動画で見せていただいて、大変分かったのですが、匂いや音や、そういうことを自分たちの目と耳で実感していきながら、シェアしていかなければならないのかなというふうに思います。

それと、もうひとつ、これは私もよく大学の授業のほうで言っていることなのですが、一番最初の講義で言うことなのですが、やっぱりどうも日本人は、リスクということに対する考え方、マネジメントがよくできていないことがあります。

リスクは、0 か 100 でしか今まで私たちは考えることを知りませんでした。ですので、原発事故が、福島の事故が起きる前までは、事業者も国もリスクは 0 だというふうに言っていましたし、今、事故が起きた後は、必ずこのような過酷事故が 100%起きるといふに思っている人たちもいる。

また、もっと原子力をやらなくてはならないという人たちは、また原子力のリスクは 0 かもしれないということを言おうとしている。そうではなくて、私たちはリスクというのはもしかすると、ある程度の対策を打った後で、どの程度リスクだったら社会が許容できるかということ、みんなで決めることがリスクなのだとということをもう一度、みんなで認識しなければ、おそらく原子力も進みませんし、廃炉の行程もこれから進んでいかなければいけないかなというふうに思います。

そこで、やっぱり私たちが、そういうそのベーシックな共通認識を持ちながら、前に進んでいくというのが大事なのではないかなというふうに思います。

あと、私は福島事故に直面して、特に最近なのですけれども、お笑いになられる方、いっぱいいらっしゃると思うのですが、私の書棚の中にパスカルのパンセがほこりをかぶって、眠っていたのですけれども、そこに、あつ、これなのだという言葉を実は見つけまして、一番やってはいけない 2 つの行きすぎがあると。理性を排除すること、理性しか認めないこと、というふうな言葉があって、まさしくそうだというふうに思いました。合理的に割り切りすぎれば、感情を遠ざけてしまうし、また感情だけでは物事が進まない。

そういった、こう、何というのでしょうか、難しい問題をみんなでシェアしながら、これから私たちは 40 年間、福島だけではなくて、東京もそうです。日本全体で廃炉に立ち向かっていかなければならないので、世界の知見を、皆さん、いただきながら、私たちも前進していきたいというふうに思っています。

これはお二人の問題だけではなくて、私たちの問題だというふうに、ここで改めて認識を持ちたいというふうに思っております。以上でございます。

ありがとうございました。

崎田：

ありがとうございます。エネルギー政策ということで、失礼いたしました。

今、お話がありましたけれども、日本はリスクが 0 か 100 かというお話がありました。確かに私もリスクコミュニケーションの現場をやらせていただいておりますが、そういう中でこの福島の放射線とどういうふうに暮らすかという、こういう視点をみんなと話し合っていくということが、とても大変な、そこまでののがとても大変な状況だったというふうにお伝えできればと思います。

尚ですね、この後、私が 10 分くらい時間をいただいて、少し、私が福島でこれまで取り組んできた中で、感じたことなどお話をしたいと思います。それが終わった段階で、マグウッドさんとレンティツホさんにご登壇いただきますので、あとちょっとお待ちいただき、ご準備いただければありがたいと思います。

よろしく願いいたします。

自己紹介がずいぶん遅れましたけれども、リスクコミュニケーションや、環境エネルギー学習、そして、環境の視点の町づくりなどを専門に動いております。

仕事としてはジャーナリストとしてやってきたのですけれども、どうもこういう分野は現場型が大事だというふう

に感じまして、現場の方といろいろと出会いの中で、今、NGO を 2 つ運営しております。

ひとつは地元の東京の新宿で、環境学習を実施する公設の環境学習情報センターを、地域の団体の方や企業の方と N P O を作り連携で運営しております。もうひとつは、全国各地で環境を視点にした町づくりを実践する方たちのネットワークということで運営をしておりますが、そういう中でこの福島の事故が起きて、私がどういふふうに関われるかということを考え、いろいろな対話の現場をまず見させていただきました。その時に、私は環境分野でやってきましたので、環境省にお願いをし、環境省が除染をするということで、除染に向けた仕組み作りや放射線の影響した廃棄物に関する地域の方の対話集会、いろいろながありますけれども、そういうところをかなり行かせていただきました。

その時に大変感じたのは、しっかりと情報をもちろん地域の方にお伝えし、地域の方のご意見も伺いたい。そして、半歩でも先に進めないといけないことが沢山あるのですけれども、地域の方はやはり、今の気持ち、とにかく理屈は分かるけど、感情が抑えられないので、まずは、その怒りとか悲しみをまず話したいとおっしゃる方が大変多く、そういう場が冷静に進むようにお手伝いをするのが大事だと思ひまして、最初の 2 年間くらいは、そういう現場の進行のお手伝いをずっとやらせていただきました。

そういう中で実は普段、私がリスクコミュニケーションで、本当に大事だと思っていることがあります。こういうような形で私は CO2 削減とか、生活の上での廃棄物、あるいは高レベル放射性廃棄物、そして、今回の福島などのリスクコミュニケーションの現場をやってまいりました。高レベル放射性廃棄物の処分ということも、今、社会の課題としてあるわけですが、どこの場所にとこのようなことの前には、この課題があるということ、地域でしっかりと話し合うような場作りが必要だと思ひまして、今、資源エネルギー庁に提案をさせていただき、全国各地で、1 年に 10 回くらいずつ、ワークショップをさせていただいております。

こういうような中で、私は事故の後、やはりいくつか、きちんと取り組ませていただいたほうがいいなと思ってやっていること、続けていることがあります。省庁の方とか専門家、それも放射線の専門家、原子力の専門家と環境の専門家、そして自治体の方、NGO、そういう方たちが事故の後の制度を作る、システムを作る、そこをしっかりと話し合わなければいけないのではないかと考え、自主勉強会を呼び掛けて、最初は 2 週間に 1 回、だんだん 1 ヶ月に 1 回、最近は 2 ヶ月に 1 回くらいになっておりますが、40 回ほど続けてまいりました。

もちろん専門家の方が多い場ですので、例えば環境動態研究の今後を、どういふふうな予想がたっているのか、そして、それを地域の方にきちんとお伝えするにはどういふ視点が必要かというような意見交換とかもやっておりますし、コミュニケーションそのものにきちんと視点を当てて、多様な方と今、必要なものをきちんと話しあっていくというような場作りをしております。

こういうような中で感じる色が色々あるのですけれども、まず福島の方々の想いというのは、時間経過の

中で変化してきていると感じております。

まず私がすごく感じるのは、やはり一番最初は、この災害が発生して、安全神話の崩壊ということで、専門家の方、事業者の方、発電事業者の方、国、いろいろな方々への抑えられない怒り、悲しみ、不信感というのが渦巻いたわけですが、実はその後、こういう避難した方々も自分たちの想いをインターネットとか、いろいろすぐに発信をされて、共有されると、瞬時にそういう不安感が広がっています。また、マスメディアにもそういう不安なものを強調される専門家も大勢登場されたり、いろいろあって、社会不安が非常に増幅され、福島に対する風評被害もあまりにも高まってきたということで、逆に福島の方は困惑された時期が非常に長くあるのではないかと思います。

あるいはその困惑が今も続いておられる方が大変多いのではないかと、というふうに思っております。

そういう中で、信頼関係の再構築に向けて、顔の見える信頼作りとか、過剰なリスクと付き合うリスク、そういうものを伝える専門家への信頼関係とか、除染、環境回復から復興に向けた生活再建とか地域再生への思い。こういうことをきちんと共有することの大切さ、多くの福島の皆さんがお感じになっているのではないかと感じております。

また、どういうふうな気持ちで、これをいつも作っているかというのをお話しますと、先ほど福島の方々の想いは時間経過で変化しているというふうにお話をしましたが、もうひとつ、住んでおられる場所、あるいは、どこから避難しておられるか、その地域が抱えておられる課題によって大変違います。

そういう状況が分かるように表にしてみました。避難継続地域で線量が高いところから帰還準備地域や日常生活を取り戻す地域という地域による違いがある中で、除染も、徐々に環境回復から復興に向けて、どんなお考えとかご質問を受けることが多いか、そういうような変化を書きました。やはり今、帰還準備あるいは避難継続地域の皆さんにとっては、仕事とか暮らし、新しいものをどう作るのかということも大事ですが、コミュニティーをどうやって、もう一度作っていくのか。そういうことに大変心配をされ、関心を持っておられる方も多いわけです。そういう方と、自治体の復興計画と、どうやってつながっていくのか、いろいろなことをきちんとコーディネートしていくのが今、大事なのではないかと感じております。また、これは機会があればお話をさせていただこうと思っております。

こういう中で、リスクコミュニケーション、今日、こういう地域の対話のことをお話する機会ですので、ここに書かせていただいた1番、2番、3番、下に書いてあります、ここを皆さんに、ぜひお伝えしたいと思うのですが、やはりコミュニケーションをさせていただく時に、情報をしっかりと発信するということは、まず大事です。そのこと自体も先ほど来、優しい言葉にしないと、発信している方は、そのつもりでも、なかなか伝わっていないということもあります。

そういうことも踏まえて、この第2ステップにあるように、対話の場、きちんと質問をし、答えていただきながら、自分の疑問を解決していくような、ちゃんとしたコミュニケーションの場が必要なのだということが、大変重

要だと思っております。

実はリスクコミュニケーションに関しては、その次の第3ステップというのも重要だと思っておりますが、地域の皆さん、あるいは関係する皆さんが、自主的な取り組みを自分たちがおこなっていきながら、リスク削減に向けた活動もやはり起こってきます。こういうことをどうやって支えるかという、そういうところも非常に大きな視点、重要なところではないかと思っております。

こういう意味で、市民や地域の方々が参加をする場をきちんと作り、リスク削減に取り組むことをいかに関係者が応援するか、そういう仕組みを作っていくのかということが大事だと思っております。

こういうようなことで、今、ひとつ紹介をさせていただきたいのは、除染情報プラザという施設が、今、福島駅の近くにあります。

これは、福島県と環境省が連携をして、除染を中心にした展示、あるいは情報提供ということで場を設けていますけれども、これに関しては、3つの大きなテーマを持ってやっておられますが、ひとつが、まずやはり除染や放射線に関する情報の提供ということ、これが1番目。2番目の対話に資するために、専門家を派遣したり、移動展示をして、いろいろと顔の見える対話をするような、そういう専門家派遣のシステムを作って、取り組んでおられます。

3番目もやはり地域との対話をしっかり深めていくというあたりで、地域コミュニケーションというものに、取り組んでおられるわけですが、私は、この除染情報プラザの運営委員、アドバイスをさせていただくという立場にあります。

その中で、私はぜひ紹介をさせていただきたいのが、地域とのコミュニケーションのところにポジティブカフェという取り組みがあります。こういう名前なのですが、除染や放射線不安とか、福島の再生に取り組む方々自身が情報を交換して、経験を共有するための情報交流会、そういう場を作るといった取り組みを始めています。

やはり、最初は本当に被害を受けておられる皆さんですので、ご自分の生活再建というところが大変重要ですが、それだけではなく、やはり放射線を例えば自分たちで線量を測ってみる。そして、一緒に取り組んでみて、政府機関とか公的な機関が取り組んでいるデータがきちんとしているのかというのを、ちゃんと自らチェックをしてみる。いろいろな取り組みが進んでいるのではないかと思っております。

2013年度から始まりましたが、最初は福島県の中通り地区といいますけれども、ちょうど真ん中への海からは遠い地域、今回の放射線量は浜通りよりは低い地域なのですが、特にこういうところの、それでもやはり放射線ということに関して、こういう一緒に暮らすなんて、初めての出来事ですので、多くの方が不安を持っておられるけれども、それを自ら一緒に語り合うような場を作るといった取り組みをしておられる方たちに集まっていただくという、そういうような形をとって、活動しておられます。2014年度は逆

に県外に避難されている方の視点も踏まえたり、あるいは自分達の食べ物にどのくらいの影響があるのかをみんなで測ってみるとか、いろいろなことをやっている団体が少しずつ増えてきたり、お母さん同士が対話をするような場も増えてきていますので、そういうような場の支援というのも起こってきております。

実はこれをぜひご紹介したいなと思っていましたが、2015年、ちょうど昨年1年間は、今度は浜通り地区、この線量の高いところで自ら取り組もうというような方、個人、あるいはグループの方に参加をしていただいて、こういう対話の場を持つということを進めておられたのですが、いわき、南相馬、そして全体会というようなことで、2015年も、やっておられました、実はその時のいろいろなコメントの中で、私は皆さんにぜひご紹介したいなというのが、3つありました。

南相馬でお話し合いをしていた方のいろいろなご意見の中から、ひとつめは放射線の不安の低減には共有、共感する相手が必要で、そのためにも信頼関係作りは特に重要。

信頼関係がないと相手の心を受けとめられない、理解し合えない。また、家族の中でも会話をしていかないといけない、というようなこと、ご発言が非常に印象的でした。

2つめは放射能の不安を払しょくして互いのネットワークを深めるためには、情報の共有と発信、そして、交流の機会作りがまだまだ必要だというご意見も大変多くありました。

最後は放射能汚染から産業の復興に続けていくには、魅力ある仕事を担う人が必要です。

里山のレジャーとかですね。そういうことの復活のためにも人作りとか、そのためにも地域からの情報発信が必要。こんな意見も、地域の方々から出てきているというふうな状況です。

こういう中で考えているのは、廃炉はやはり地域共生、地域再生との共存なくしては、成り立たないということと、もうひとつ、これまでもリスクを背負って支えてきた地域へ、やはり全国の方々が感謝や敬意の気持ちを持って一緒に取り組むような場が必要なのではないかということです。

そして、こういうような地域の問題は、日本社会全体が抱える問題であり、福島は過酷事故から復活をするという大変な場のケースではありますけれども、今、高齢化で力を失い始めた全国の地域社会が、どうやって自分達の地域の将来を作っていくかという、そういうような課題への貴重な道筋になっていければいいなというふうに感じています。

重大事故から立ちなおる世界の学びの場を目指して、取り組んでいくという、こういう視点が大事というふうに感じております。これは、私のこれまでの体験を含めて話させていただきましたが、この後、アドバイスもきちんと受けながら、皆さんと少し意見交換をし、会場の皆さんからのご意見も伺い、これからの増田CDOが通訳として活躍されるために何が必要かというのを、みんなで話していければいいなというふうに思っております。

時間をいただきました。どうもありがとうございます。

はい、それではお待たせいたしました。

マグウッドさんとレンティッホさん、にご登壇いただければ、大変ありがたいと思います。 どうも、長い間、聞いていただき、ありがとうございます。

それでは、最初に登壇者で意見交換をさせていただきますので、その後、アドバイスをいただければありがたいと思います。 よろしくお祈いします。

それでは、増田さん、最初に少し増田さんのほうからいろいろ情報発信もこれからしっかり取り組んでいきたいというお話がありました。 その後、いろいろ丹羽先生はじめ地域の方、そして遠藤さん、私、からも、情報発信だけではなく、対話とか、本当に伝わるのが大事なのだという話もありました。どんなふう to 受けとめていただいたか、まずご感想をいただき、他の皆さんからもちょっとコメントいただければと思います。 よろしくお祈いします。

増田：

はい、ありがとうございます。 増田です。

今、丹羽先生、高村さん、吉川さん、遠藤先生、崎田先生と、皆さんから同じ内容を指摘されたと思っております。 情報発信という言葉がいかん、というのはその通りだと思っております、やっぱり発信という言葉を使ったこと自身が私もまずかったなと思いますけれども。

双方向で対話をする、対話を分かりやすい言葉でやれ、知りたいと伝えたいをしっかりと一致させろ、知ることが大事、シェアすることも大事、発信でなく双方向でやれ、優しい言葉で、そして最後、崎田先生から情報の共有、発信、交流というところまで含めて、しっかりとっていくというのが大事だという言葉を受戴しまして、その通りだと思ひます。

じゃあ、これをどうやってやるのが大変難しいと思ひています。われわれも今までもなるべく分かりやすくということで、絵を使ってみたりいろいろやってきたのですが、おそらくそれって、私たちが思っている分かりやすさであって、皆さんから見た時には、われわれが必要とするのはそんな情報じゃないよ、と。

東京電力、もっとこういう情報を発信しなければいけないだろう、というところが多分あるのだと思ひますね。 だけど、そこが分からない。 そこが上手く対話できていないのだと思ひます。

対話をする対象の人も決めて、われわれは今までいろいろやってきたつもりなのですが、もっと違うやり方、もう少し、何と言うのですか、福島第一の周りに何かそういう場所を作って、先ほど、先生の除染プラザとかカフェの話も同じかもしれませんが、そういう場所を作ってでも、われわれが皆さんと対話を通して、こういうことを発信すると皆さんには、理解していただける。 あるいは福島第一がどうなっているかというのが、納得いただけるか、というのを探していくのが大事なかなと思ひて、今、考えておりました。

崎田：

はい、ありがとうございます。

情報を発信するだけでなく、きちんと対話し、共有できるような、そのためにどうふうにしたらいのかを考えていきたい、というふうに積極的にお話いただきました。ありがとうございます。

ぜひ、私、丹羽さんや他の皆さんから、じゃあどうふうにしたら、本当にそういう情報が共有できるのか、あるいは、そういう場ができるのか、どんなことを期待するのか、少しそういうところをご提案いただければ、ありがたいと思いますが、どなたからでも結構です。

丹羽さんからしますか。先ほどご提案の中にもいろいろありましたけれども、地域単位がいいだろうというお話がありました。自治体も巻き込んだほうがいいのじゃないかという気もしますけれども、どんなふうにみんなのお話からお感じになったかも、ひと言お願いできますでしょうか。

丹羽：

われわれはICRPという組織で、2011年の11月からダイアログセミナーというのをやってきていました。それは、だいたいラウンドテーブルで20人くらい、20人から25人で、地域の住民の方、それから地域の行政の方、それから福島のマスメディア、それから地域の専門家と、東京とか外国からの専門家。この中で、われわれICRPは何も言わない、専門家としては、ダイアログセミナーは2日間にわたり行います。そして午前中が共有すべき情報の発表の場。午後は対話の場。ということをやってきました。その対話のやり方は割と単純で、ラウンドテーブルで、自分の好きなことを5分、例えば喋ると。20人で5分ですから、100分という時間。

それからセカンドラウンドやります。おもしろいのは人間が喋ると必ず人の言ったことに影響されて、2回まわすとだんだんちよっと意見が集約してくる部分が見えます。

そういったことで、共有できるものをどうふうにするかということでやってきました。ただこれは非常に効率が悪いです。このようなダイアログセミナーを毎月やるのは不可能です。でもこのような共有を普段やっておられるのは、地域のコミュニティーであると。

だからコミュニティー単位というものが災害時にうまく機能するのではないかと。そのような形で12回程そういうのをやっていましたが、一番、やはり基本になっているのは、顔が見えて対話が成立して、という関係を作るまで、結構、時間がかかります。1回や2回でなかなか、そういうふうな信頼関係というのはできないものである、ということで、これはすぐに答えが出る、回答というものはない。だから時間かけて、じっくりやるしかない。それで個々でやっていたら大変だけれども、せいぜい集団の単位としては、コミュニティー単位かというふうなことを思いました。

ともあれ、TEPCOさんが、大変な思いをしておられるといのは、われわれも今回なんかの話も聞いて分かったので、逆に言えばTEPCOが鬼でも悪魔でもなくて、普通の人間なのだというのが、見えるような場をどの

ように作っていくかということがあります。

原発サイトなんかを実際見ていただいて、事故の当時の経験を共有していただくのが大切だと思います。

また事故時に原発にとどまっておられた方は、とんでもなく不安であったと、それを一般の方に知っていただいて、ということが大事かと思えます。どのようなことを共有するか、すなわち共有の第一歩はそういう話し合いだと思います。

崎田：

はい、ありがとうございます。

共有の第一歩は本当に地域の方と働く方と一緒にいるということも本当に大事かと思えますし、継続というお話で、やはり一度でそれが上手くいくというお話ではない。やはり継続してその方と対話をする、あるいはそういうグループで対話をする、そういうことが大事なのかと思ひながら、伺いました。

吉川さん、高村さん、何か今の情報共有でコメントがありましたら。

高村：

正直申しますと、震災後、合意形成だったりとかそういった、正直、初めて聞いたような言葉が出てきて、それを対話の中でやっていきたいと思いますとか、例えば平和構築やっていきたいと思いますとか言われた時に、すみません、普通のレベルの生活をしていたら、ないです、そういった言葉が。ですから、やはり対話というふうに簡単に申します。ですが、例えばプロセスワークだったりとか、自分自身がファシリテーターとして物事を進めていたりとか、ですから、ひとりひとり、個人個人の持っているレベルを上げていかなければ、多分、できないのかなというふうにも思っております。ただ、それが、みんながみんなできるわけでもないですし、気づくまでにも時間がかかります。

ですが、それをもっと時間を掛けたりとか、そういった場面を増やしていったりすることが、やはりこれからの問題というか課題だというふうにも思っております。ただ、私自身は普通に生活をして、ここで暮らしたいだけなのです。本当に普通に働いて、子育てをして、ここで真っ当な生涯を経て、終わりたい。先祖伝来のお墓に入って、私は子どもたちに、この自然と福島を残していきたい、というだけなのです。

ですから、それほど本当は難しくないのかもしれないですけども、今すごく難しくなっている問題はいったい何なのかというということを、みんなと共有していきたいというふうにも思っております。

崎田：

はい、ありがとうございます。

地域の方々とかそういう動きを継続していただく、やはりそのキーマンに高村さんになっていただく状況ですので、ぜひ皆さんにも伝えていただければ嬉しいと思います。

ありがとうございます。吉川さん、やはりすでにご自分でやっていただいておりますが、今日のいろいろな皆さんの話から、よりそういう取り組みを広げるために、どうしたらいいのか、何かご提案とかコメントがあればいただければと思いますが。

吉川：

そうですね、私はもうすでにやっていることですから、失敗談のほうを言ったほうがいいのかと単純に思います。私も最初、学習会といまして、オフィスを借りて、来てください、来たら教えます、みたいなスタンスだったのです。まあ、まったく来ませんよね。来たいとも思えない。廃炉は最初から、とつきにくいし、恐いし、難しい。そこで私が考えたのは、廃炉を知って、こんないいことあるよ。

例えば、幼稚園の先生がお子さんを預かる。その預かっている幼稚園が第一原発の近く、いわきにあった、南相馬市にあったとしたら、子どもに対しても、親御さんに対しても説明できたほうがいいですよね、とか。

暮らしの視点で学習会をおこなう。その暮らして、皆さん、違うと思うのですよ。農業やっている人にも当てはまるでしょうし、喋れた方が絶対、気持ちいいよ。「いやあ、難しいから。」と言われたら、「大丈夫です。誰にでも分かる言葉で教えます。」「でも、それ本当なの？」と言われると、じゃあ、私自身が現場に行き、ちゃんと見てきます。知識もありますよ、なんて、相手にまずは寄り添う、一緒にやりましょうではなくて、今はこっちの業界の方々が近づいていってあげる。その先に住民の方をお願いしたいのが、双方向ですから、時には頑張っている姿を応援してもらいたいですね、廃炉現場の。

実はお父さんが廃炉現場で頑張っている方とかは感じやすいですから。そういう身近なケースで紹介しながら、住民の方は東京電力に対して、事故の責任は追及するかもしれないですけども、やっている廃炉作業はまた別でしょ、という気持ちになってもらうとか、そういうことを意識的にするのがいいのかなと思います。

崎田：

はい、ありがとうございます。

遠藤さん、今日は本当に社会全体からの視点ということで参加いただいて、いろいろ先ほどもお話いただきました。今日のお話をこれからどういうふうに、今は、外でいろいろとやろうとされていますけれども、地域の方の対話を活性化するという点に関しては、今日のお話から、どんなふうにお感じになったか、ぜひお聞かせいただきたいのですが。

遠藤：

地域の活動について、私のほうが、お二人の活動について、それ以上のものをご提供できると思っていないのですが、そういうところに例えば参加させていただくような機会があれば、もちろん足を運びたいというふうには思っております。

もうひとつ、もっと日本社会に全部伝えていくというふうな役割では、誰が演じるのかとなった時に、原子力の専門家の先生やたくさんおられる研究者の方々が、どうしても事故後は口を閉ざしてしまわざるを得ない状況が続いていたように思うのです。やっぱり東京電力の方にその通訳を、先ほど通訳をしてくださるというふうな意気込みをおっしゃっていたのですけれども、そればかりを全部、東京電力に任せるというのは、酷でありまして、その道の研究者の方々が、そろそろ大きく口を開き始められて、世の中に対してご

発言をどんどんしていくという、元通りの姿に、もちろんずっと継続的にやっておられる方はあるのですが、そういう状況に戻っていくということも必要ではないかなというふうに思っております。

やはり専門家じゃないと分からない部分、専門家だからこそ翻訳できる部分があるように思います。

あともうひとつは、せっかく海外の方がこちらにもいらっやっておられます。 マグウッドさんは、もうメディアの取材を何本もお受けになられて、今日、福島民報の第一面を飾られておられますが、海外の知見をご披露いただくことが、事故の経験のおありになる国々は特にそうなのですけれども、私たちにとって重要な情報になるということを付け加えさせていただきたいというふうに思います。

崎田：

はい、どうもありがとうございます。

この後、アドバイスを伺いますが、その前に会場の方で、ぜひコメントを発言したい、あるいは提案をしたいという方がいらっやいましたら、ここでご発言いただくようにしますが。

今、そういうお気持ちの方、何人くらいいらっやいますか？ ちょっと手を挙げていただけますか？

おひとり、お二人、お二人から手が挙がりました。 それでよろしいでしょうか？ はい、ありがとうございます。

それでは、恐れ入りますが、今、お手を挙げていただいたお二人、ちょっと立っていただけますか？

そこに今、マイクが走ります。 じゃあ、先に手を挙げていただいた方。

はい、今日のテーマと、どういうご関係かをひと言お話し下さい。

質問者：

ちょっと2つほどなのですが、風評被害、大変苦しんでいる中で、いわき、福島、この地から遠くなればなるほど、正しい情報が伝わっておりません。 震災以降、関東の方からは、ある程度の理解は得られたような気がします。 ただ、時間と共にそれは薄れております。それは関西、九州なんか行くと、ほとんど理解が得られない。これが海外、中国、韓国、そしてヨーロッパに行くと、もっともって理解が得られない。

東北の物はだめ、日本の物はだめ、そのような実態、今日、海外からもいらしていると思います。

どんな状況なのか教えて、実態を教えてください。

もう一点は、情報発信ではなくて、共有と、対話だということですが、それは確かに時間を掛けて、小さいところからコツコツ積み上げていくのがいいと思いますけれども、ただ、実際、被災地、被災者、農林水産第一次産業に従事している者、今まで5年間、我慢してまいりました。

けれども、それをさらにコツコツと積み上げていく、その時間、そんなには待ってられない。 もう少し、なんかこう、海外からいらしている方には、その情報をきちんと伝えていただきたいのですけれども、そのへん、もう少し効率よくやれるような方法はないのでしょうか？

崎田：

このお話、海外のご専門家に伺いたいですか？

それとも日本のそういうことを取り組んでおられる方に伺いたいですか？

質問者：

できれば、両方から伺えればと思いますけれども。

崎田：

はい、ちょっと考えさせてください。ありがとうございます。

それでは、次にお手が挙がりました方、よろしく願います。

質問者：

コメントを交えて、増田さんと高村さんにご質問させていただきたい。

崎田：

はい、それで、申し上げるのを忘れていましたが、1分くらいでまとめていただければありがたい。

よろしく願います。

質問者：

増田さんには、通訳とおっしゃったけれども、私、少し誤解をしているかもしれないが、通訳じゃないのじゃないかなと。あなたご自身の言いたいこと、情報発信だろうが、上からだろうが何でも構わない。

率直に言っていたことが必要じゃないか。通訳じゃないのじゃないかと思う。

あなたは大変雄弁で、私のところのシンポジウムにいらっやって、素晴らしいスピーチされた。

したがって、話すテクニック、伝え方の問題ではなく、何を発信するかが問題じゃないか。

高村さん、あなたの話を聞いていて、私は、昨日、東京で出た沖縄の辺野古基地反対の運動をしている、ヤマシロヒロジさんを思い出した。ヤマシロさんは激しい人ですが、あなたは淡々とお話になったが、しかし、今、置かれている状況に対する強い怨念、悔しさをお話になった。

そこで質問、あなたは結局、何を知りたいのですか？ どういうことを知りたいか。

おそらく問題は何を知りたいかが、なかなか分からないということかもしれないが、すぐそばにいらっやる増田さんに向かって、こういことを言えと、こう、おっしゃっていただきたいと私は思います。

崎田：

はい、短かくまとめていただきまして、お二方、感謝いたします。

それでは、お伺いしたいのですが、まず、お二人目のご質問を先にさせていただきますけれども、まず増田さんに、もっとしっかり言いたいことを言っているのじゃないかということがありました。

増田さんに、それを受けとめて、ひと言、言っていただければと思います。

その前に高村さん、これ聞きたいってすぐ言えます？ 高村さんが今、一番知りたいことは何か、それをパッと行っていただいて、それを受けて、増田さんにお答えいただきたく。先程、通訳じゃなく、言いたいことを言って、というようなお話がありましたので、何かひと言お願いします。

丹羽：

ちょっとその前に、私、丹羽ですが、途中で入ります。

被災なさった方が、なぜ放射線に対して非常に不安になり、それで人々の関係が分断されてしまうか、ということは私にとっては非常に気になっていたことです。

でも、よく考えたら、あたり前のことよねと実は思っております。なぜかといいますと、例えば、人間、自分自身が自分の状況をコントロールできなくなると、その人、壊れます。心が壊れます。そのような状況にちょうど放射線というのは非常に具合よく使われます。第二次世界大戦後、冷戦の中で、放射線というのは、ひとつの非常に大きな道具になりました。だから、その中で、そのような非常に不安な要素を自分の周りにたくさんあるのだ、と言われた途端に、自分でコントロールできない状況が生まれ、地域の方の心が壊れる。

これ、非常に当然だと実は思っております。だから、それは私なりに考えたことで、それに高村さんが何か加えてくださるなら、いざしらず、多分、それをはっきりと言えるのであれば、だから今のご質問、はっきりそれを言うのであれば、それは多分、プロが当然ながら最初にやるべきことなのです。だから、私、実はしゃしゃり出しました。

崎田：

はい、ありがとうございます。高村さん、何かコメント、ひと言で結構です。

高村：

正直申しますと、非常に難しいです。

何を知りたいのか、知りたいことは山ほどあります。簡単に言えば本当に廃炉にできるのですか？

それが一番、聞きたいです。ここにいて。そして、どうしてここに福島県民の人が少ないのですか？

どうして、この会場に、もっともっとたくさんの被災者の方がいないのですか？ そういったことを聞きたいです。

それは、増田さんではなく、経産省だったりとか、今回の会場作った方になりますから、ちょっと違うかもしれません。

崎田：

はい、ありがとうございます。

今の、なぜ福島の方、少ないのというお話、みんなで、関係者の方で、受けとめさせていただければなと思います。ありがとうございます。

じゃあ、増田さん、ひと言、先ほどのご質問の後のコメントをいただければと思います。

増田：

はい、ありがとうございます。

おっしゃった私の想いをしっかり発信せよというのは、その通りだと思います。

ただ、その中でやはり難しいところがあると思っていて、通訳という言葉を使ったところがあります。

例えば、今日、ご紹介した、屋根を外してこれから瓦礫を取り除きますという、屋根を外しますということでさえ、その意思決定は自分たちでしたつもりですが、本当に今の屋根を外していいのかというところが、皆さんの非常に不安にかられるところになりました。ということは、私はやっぱり屋根を外すというのは、社内で仕事を進めるにあたっては、外の方々が屋根を外す時に、どういうことを気にして、屋根を外すとみんなが安心して、屋根を外していいというふうに考えていただくのか。

それはちゃんと社内に発信しなければいけないと思います。中でやっている作業としては、実はこれからの作業、特にそうなのですが、作業を進めることというのは、やってくれる作業員が被ばくすることに繋がります。作業員が被ばくをして、一生懸命仕事を進めることと、その仕事を先に送ること、あるいは、やらないことで地元の方々のリスクを低くできないこと、このどちらを優先するのかというのは、しっかり社内で議論した結果を、皆さんに報告して、皆さんにそこを分かっていたかないと、先に進められないのだと思っています。

そういう意味で教科書がないような世界で仕事しているので、こういったちょっと通訳という言葉、そのところで使ったつもりなのですが、必要だと思っています。

おっしゃる通り、しっかりと意思決定は私がやっていく必要がありますし、私が皆さんに対して、これからこういう仕事をやりたいと思っています、こういうふうに意思決定をしたいのですが、皆さん、いかがですかという、今日のまさに情報の共有とか対話ということなのだと思いますが、そういう場に挙げて、それを皆さんに議論していただき、「よし、それでいけ」と、言っていただいて前に進むというのが、この廃炉で必要な仕事の進め方かなと思っています。ありがとうございます。

崎田：

はい、ありがとうございます。

ご質問いただいた皆さんも真剣にお話いただき、ありがとうございます。

この後、私、マグウッドさんとレンティッホさんに、アドバイスをいただきたいと思いますが、その中に、先ほど最初の方の質問にあった、やはり風評被害、いわゆる食物とか、いろんなことに対する風評被害。

国内でも問題になっていますが、海外からのそういう声もあるので、そういうことに対して、どういふそれをお感じになっているか、そういうことも、ひと言お話しいただければ、ありがたいと思います。

よろしく願いいたします。

W.D.マグウッドIV：

先ほども、午前中ですけれども、申しましたけれども、食糧、食品という問題は非常に重要な問題です。技術的な話では必ずしもありません。皆さんもご存知の通り、この食品についての試験はきちんとやって、安全だということが宣言されております。そして、その試験のプロセスについても皆さんは信頼を寄せている

と思いますが、それでもなお安全なのかという疑問が残るわけです。

日本において、その食品の安全というのは極めて重視されているというのが印象です。ですから、それに対しては、より感情的なのではないかと思います。アメリカ人はそこまでは、こだわっていないと思っております。でも、日本においては、さらに重要だということは認識しています。

ちょっとしたマイナスの情報がこんなに大きい影響をおよぼしてしまう。いったん、そういった風評被害が発生すると、それを回復していくのに、ものすごい努力が必要なのだと思います。

ですから、それを解決するためには、一貫して、そして継続して、その誤解を解いていくということだと思うのです。正しい情報を提供し続けるという努力だと思うのです。

それをずっと続けていくことで、その結果が出てくると思います。それでもなお風評被害はあるのかもしれませんが、これも少しは改善してきているのではないかと考えています。

前に話をしましたがけれども、2012年の半ばくらいに来日をした時に、とても上等のお寿司屋さんに行きまして、ホタテがあるかと聞いたのです。そうしたら、その人が、「え、そんなホタテなんてありませんよ」と恐れおののいた様子で言ったわけなのです。東京ではホタテが食べられないということ、その時、知りました。それは合理的な反応ではなかったと思うのですけれども、それが実態でした。

でも、今はホタテも食べられるようになってきました。例えば、韓国。韓国は福島の魚、日本の魚を食べなくなっただけではなくて、もう魚全般を食べなくなってしまったのです。あまりにも心配して。

ですから、とにかくにもしっかり時間を掛けないことには、そういったことを解いていくことができない。ですから、当局やそれぞれの組織が正しい情報を発信し続けるということが重要だと思います。さっき私の発表の中で言ったように、国際的な枠組みが必要だと思うのです。国内の人々も、もちろんそうですけれども、海外の人に対しても、こういった事故の後には食糧が安全だ、食品が安全だということを、検証して示す枠組みが必要だと思うのです。それが今日、あまりないのですよ。

そういうプロセスがないということ自体も私、ショックなのですけれども、しっかり作っていく必要があると思っています。

崎田：

今日のこのセッションに関してのアドバイスもお願いできたらと思います。

W.D. マグウッドIV：

そうでした。すみません、じゃあ、もう少しだけ、マイクを握ったまま話します。

第一に、非常に重要な情報もりだくさんのセッションだったと思います。それぞれのパネリストの皆さん、今日はお発表ありがとうございました。

この場を借りまして、高村さんに、話をさせていただきますね。何年も前、そんなに前じゃないかな、10年

くらい前、アメリカである原子力発電所がありました。福島プラントのような発電所でした。

ブレイドウッドという発電所です。このブレイドウッド発電所で事故が発生しました。当然、福島のような規模では到底ありませんけれども、ブレイドウッドでは何が起きたかという、放射性廃棄物がかなり漏えいしたのです。地面に漏えいが発生して、地下水にまでそれがいたってしまったのです。

ですので、飲み水が飲めなくなってしまって、みんな、その周辺の人たちは井戸を使っていたのですけれども、その水が飲めなくなってしまった。そして、一部の人たちは、それこそ家を売却したのです。

土壌が汚染してしまって、そこに住めないと考えたから。なので、電気会社、電力会社に売却する人もいましたし、ある意味その影響を受けたので、売却できずにいた人たちもいました。怒り心頭だったわけです。私が米国の原子力規制委員会の委員としていまして、現地に行きまして、その地元の 50 人程の人達と話をしたのです、その被災した人たちです、いふなれば。

この人たちとまずは話をしたのですけれども、3 時間もこれをやったのです。

そして、その人たちと話をしながら思ったのは、皆さんから聞かれる質問は、とっても基本的なものばかりでした。ところが、この何年も経過している中で、電力会社の人も規制当局の人も、そういう質問に対して、しっかり答えられていなかったのです。ですので、基本的なことを聞かれていました。

例えば、飲み水の基準はどうなっているのか、とか、あるいは、汚染の単位はどういうものかという質問があって、その質問と回答が行ったり来たりということを 3 時間もやったのです。

最終的に住民の皆さんが私のところに来て、「何年も前になぜこういうふうにしてくれなかったのだ。」

こういうふうと言われたわけです。3 年も前に求められていたことが、できていなかった。

「ようやく分かりました。」というふうに、そういうふうにおっしゃっていただいたのです。

今日も会話を聞きながら、そんなことが見え隠れしました。それは、人は組織を信用するのではなくて、人を信頼するのです。ですから、十分にこういう被災した人たちの前に立って、そして、話をするなんて、自信を持ってなきゃいけないわけなのですよ。

丹羽さんがおっしゃったように、フェイスツーフェイスの対面して話をする、きちんと質問に対して答えを提供して、一週間後に同じように、また繰り返すということ、繰り返しやっていると、情報源として信用してもらえない、信頼できる相手と思ってもらえないのだと思います。

そこなのです、対話が有効になってくるのは。対話は単にステージに立って情報を投げて、いくつか質問の回答を提供して、おしまい、というのでは対話にはなりません。やっぱり継続的にやってこそ、対話と呼べるのだと思います。それから、これも午前中、申しましたけれど、技術的な情報をこういったプロセスの中で、みなさん、たくさん受け取るわけです。でも、私とか増田さんとか一生懸命やるんですけれども、簡単に説明することができないのです。複雑なことだから。なので、そこをプラスアルファの支援をしなければいけないのだと思います。例えば、ICRP の対話の話でも、これは浮上していましたが、他の専門家を客観的な、少し外の人たちを巻き込んで、どういう意味の用語なのか、どういうコンセプトなのかということ

説明してもらおうというのが、有効かもしれないと思いました。結局のところ、エンパワーメントだと思うのです。

つまり人に力を与えるということ、それは被災した人たちは自分たちの状況をもっとコントロールしたい。でもそのためには情報が必要、自分の前で何が起きているのかということが分からなかったら、それはエンパワーメントされている状態じゃないのです。力がないのです。

さっきのスピーチの中で、何から逃げているのか分からないというふうに高村さんおっしゃっていました。

それはものすごく不安だと思います。ですので、対話を続け、情報を提供し、将来、何が起きているのかということ、しっかり分かるようにしていかなければいけないのです。

それは、必ずしも自分はその状況を嬉しく思うというような実態ではないかもしれない。でも少なくとも事実を知って、自分がどうするかを、決める判断材料にはなると思います。

あとオーディエンスの方がおっしゃっていた、増田さんは信頼できる人だというふうに言っていましたけど、私もそう思います。

私も増田さんに対しては本当に信頼を寄せています。とても賢い人だと思いますけれども、とてもいい人なのです。なので、地域社会も信頼していい人だと思います。

この状況を難しい中で一生懸命良くしようというふうに思っていると思います。なので、私が増田さんを知るように、皆さんも、増田さんのことを知ったら、きっと安心できると思います。人と人との間でこれからもずっと、つながりを持って、対話をしていくということが重要だと思います。

それから、状況を否定されるというお話が、先ほど出てきました。海外からたくさんのお僚たちが、ここに来ていますが、それで見続けてくださいというふうにおっしゃっていましたが、間違いなくわれわれやっていますので、これから福島に注目していきますので、ご安心ください。

崎田：

ありがとうございます。

レンティツホさん、アドバイスをいただければと思いますが、申し訳ない、3分で。

J.C.レンティツホ：

分かりました、では最善を尽くします。

まず食品の問題ですが、チェルノブイリの事故後も、やはり重要な問題として、特定されました。

これは、国際調和が必要だと言われたわけなのです。福島の後でも同様のことが浮上しました。

この食品に関して、参照できる値を定める必要があるということが、浮上したと思います。

IAEA もいろいろ言っていましたけれども、具体的な数字を出して、いろいろなところから、いろいろな数字が出てしまったからこそ、混乱をきたしたのではないかと思います。

福島の報告書を見ていただいてもそれが書かれています。今後、取り組まなければいけない問題のひとつ

つです。それから、第2回の派遣をしましたが、その時にコミュニティーに対して、日本がどれだけ、ここをしっかり管理しようとしているのかということを強調した情報提供を IAEA としてもさせていただきました。

私は正直に申しまして、コミュニケーションのエキスパートではないのですが、ですから非現実的な期待値を持たれても困るのですが、われわれはリスクコミュニケーションが難しいタスクだということは分かっていると思います。いろいろな分野では当然、難しいのですが、特に原子力の分野では難しいと思います。そして、ひとつ、コミュニケーションやリスクにおいて考えなければいけないのは、バリアとベネフィットのバランスです。

つまり、プラスとマイナスを両立させる。あるいはバランスを考えるということ。事故の後、ベネフィットは何なのかというのは、明確になりませんでした。でも、これは、回復する、修復していくということが重要で、ただしこのリカバリーについても、あるいは正常化についても、期待値がさまざまだと思います。

それから、この事故後、さまざまなオプションがありました。この最終目標を達成するオプションがさまざまあるということです。このコミュニケーションの難しさは、だから故だと思います。

社会とまた地元としっかりと繋がって、説明して、そして、それぞれのオプションについて、しっかりと説明して、どうすればいいのかということ、説明しなければいけないと痛感しています。

とにかく、安全が第一です。この廃炉にとっても重要ですが、コミュニケーションの中でも、安全が重要なのです。

一方、誤解もあることがあります。例えば、福島へ派遣をされた時に、記者会見で私が説明していたのです。いろいろな提言をしたのですが、それを説明していました。

その水の問題について、どういうオプションがあるのかということ、説明していたわけなのです。

それは、廃炉プロジェクトの安全性を上げるためのものでした。ですから、そう説明したのです。そうしたら、「確かに。でも安全といったら、施設の安全じゃなくて、自分たちの周辺の安全が大事なのですよ。」なんて言われていたのです。ですので、われわれがいう安全というのは、やっぱり施設の安全じゃなくて、人の安全なのだというふうに思っています。

いずれにしても、さまざまな人がさまざまな期待値を持っていて、やっぱりそういうことを踏まえる必要があると思います。

また、子どもとか、あるいは、作業員とか、そういう誰が相手のコミュニケーションかによっても、それは考える必要があると思っています。

あと2つだけ申し上げたいことがあります。IAEA は日本と一緒に連携をして、この問題に取り組んでおります。さまざまなプロジェクト、さまざまな代表を派遣しまして、やっています。

モニタリング、環境モニタリングなどについても、そういった取り組みがあります。

私が午前中プレゼンテーションする最後の部分で、コミュニケーションが極めて重要だというふうに申し上げ

ました。それは、オフサイトとオンサイトの取り組みを連携させることが重要だと思っています。

今日の午後のこの話を聞きまして、ますますその確信を持ちました。それは、日本に限られたリソースを最適化する、そして、公衆の安全を最大化するためにも、重要だと思っています。

最もクリーンな、世界でも一番、クリーンできれいなエリアを例えば除染で達成したとします。

この福島で。ところが、それがサイトの中でコントロールされている状態だという人々のイメージがなければ、それは無意味なのです。ですので、そのためにもオンサイトとオフサイトの取り組みを連携させて、さらにコミュニケーションの改善をしていく必要があると思います。

それから、最後になりますけれども、私は専門家ではないものの私の経験から申しますと、人々は情報を一方的に提供されるのではなくて、自ら参加したいとこういうふうに思っていると思います。ありがとうございます。

崎田：

はい、ありがとうございます。

世界のご専門家にしっかりと、これからも、いろいろとアドバイスをいただきながら、福島の皆さん、そして、事業者の皆さん、みんなで連携して、本当に取り組んでいきたいというふうに思っております。

お二人の温かいアドバイス、本当にありがとうございました。そして、皆さん今日は廃炉に関するコミュニケーション、地域とのコミュニケーションが大事だということを共有しました。

今日はスタートです。これからぜひ、こういう話し合いを継続していただき、みんなできちんとこの廃炉と地域との関係を共有しながら、新しい仕組みなり作っていければと思っております。

こういう会を設定していただいた関係者の皆さんに、先ほども感謝申し上げます。

その気持ちを強く、もう一度、もっております。

本当に、登壇の皆さん、そして会場の皆さん、ありがとうございました。お疲れさまでした。